

中を走つて行きました。狼が吠えたり、わたり鴉が鳴いたりしました。ひゆう、ひゆう、風を切つて、馴鹿は駆けて行きました。空はまるで燃えたつた火のやうに見えました。

「あれがわたしのなつかしい北極光です。なんてよく輝いてゐるか、ごらんなさい。」と馴鹿がいひました。それから馴鹿は晝も夜も、前よりもつと早く走つて行きました。

パンの塊も、ハムも、たべつくしてしまつた頃、馴鹿とゲルダとは、ラップランドに着きました。

第六のお話

ラップランドの女とフィンランドの女

小さな粗末な小屋の前で馴鹿はとまりました。その小屋は大層みすばらしくて、屋根はほとんど地面のところまでも被ひかぶさつてゐました。そして戸口が大層低くついてゐるものから、内の人が出たりはいつたりする時には、腹ん這ひになつて、そこをくゞらなければなりません。その家には、鯨油ランプで魚を料理してゐるラップランドの年とつた女よりほかに

は、誰も居ませんでした。馴鹿はそのおばあさんに、ゲルダの事をすつかり話して聞かせましたが、はじめには自分のことをまづ話しました。馴鹿は自分の話の方が、ゲルダの話よりも大切だと思つたからでした。ゲルダは寒さのために、ひどく疲れてゐましたので、口をきくことが出来ませんでした。

「あゝ、それは可哀さうに。お前達はまだ、遠く走つて行かなければならないよ。百哩以上もフィンマルクの奥深く進んで行かねばならないのだよ。雪の女王はそこにゐて、毎晩、青い光を出す花火をもやしてゐるのさ。わたしは紙を持つてゐないから、乾鱈の上に手紙を書いてやるから、これをフィンランドの女のところへ持つておいで。その女の人にはわたしよりも詳しく教へてくれるだらうから。」とラップランドの女がいひました。

そしてゲルダが體を温め、食物や飲物で元氣をつけた時、ラップランドの女は乾鱈に、二言三言文句を書きつけて、それを大切に持つて行くやうに話しながら、ゲルダをまた馴鹿に結びつけました。そして馴鹿は、そこを駆け出しました。しゅツ、しゅツ、風を切つて、それは飛んで行きました。一晩中、この上もなく美しい、紫色をした北極光が、燃えてゐました。

かうして馴鹿とゲルダとは、フィンマルクに着きました。そしてフィンランドの女の家の煙突をこつ、こつ、叩きました。その家には戸口もついておませんでした。

煙突の中は大層あつかつたので、その女の人は、まるで裸で暮らしておりました。その女はなりが小さく、ずむぶんきたならしい様子でした。そしてすぐに、ゲルダの着物や、手袋や、長靴を脱がせました。さうしなければ、とてもあつくて、そこにはおられなかつたからです。それからその女の人は、馴鹿の頭の上に氷のかけらをのせてやりました。そして、乾鱈に書きつけられた文句を、三べんも繰り返して読みました。そしてそれを覚え込んでしまうと、女はスリーブをこしらへる大釜の中へ、鱈を投込みました。その鱈はたべることが出来たからで、その女の人は決してどんなものでも、無駄にはしませんでした。

さて馴鹿は、まづ自分のことを話し、それからゲルダの事を話しました。するとフィンランドの女は、そのりこうさうな目をしばたゝいただけで、何にもいひませんでした。

「あなたは太唇かしくていらつしやいます。わたしはあなたが、一本の撚り糸で、世界中の風を結び付けることの出来るのを知つてをります。もしも舟乗が、一番初めの結び目を、ほどく

なら、都合のいい風が吹きます。もし、一番目の結び目だつたら、強い風が吹きます。三番目と四番目をほどくなら、森や林も吹き倒すほどのあらしが吹きすさみます。あなたはあの娘さんに十二人力がついて、首尾よく雪の女王に勝てますやう、一吹き風の風をあの娘さんにやつて頂けませんか。」と馴鹿がいひました。

「十二人力かい。それは役に立つことだらうよ。」とフィンランドの女は繰り返していひました。

それからその女の人は、棚のところへ行つて、大きな毛皮の巻いたのを持つて来て、それを擡げました。それには不思議な文字が書いてありましたが、フィンランドの女は額から汗が出るまで、それを読み返しました。

でも馴鹿は、可愛いゲルダのために、また一生懸命、その女の人に頼みました。そしてゲルダは目に涙を一杯ためて、嘆願するやうにフィンランドの女を見上げました。で、その女の人はまた目をしばたゝき始めました。そして馴鹿を隅の方へ連れて行つて、その頭に新しい氷をのせてやりながら、かう囁きました。

「カイはほんたうに、雪の女王の城にゐるのだよ。そしてそこにあるものは何でも氣に入つて

しまつて、世界にこんないい處はないと思つてゐるんだよ。けれどそれといふのもあれの目の中には、鏡のかけらがはいつてゐるし、心臓の中にだつて、小さなかけらがはいつてゐるからなのだよ。だからそんなものを、カイから取り出してしまはないうちは、あれは決して眞人間になることは出来ないし、雪の女王の言ふなりになつてゐることだらうよ。」

「けれどもあなたは、ゲルダにそんな力に打ち勝つことの出来るやうに、何かいいものを下さるわけにはいかないでせうか。」

「この娘に生れついて持つてゐる力よりも大きな力をさづけることは、わたしには出来ないことなのだよ。お前にも、あの娘が今持つてゐる力が、どんなに大きなものであるかはわかつてゐよう。どんなにして、いろ／＼の人や動物があつた娘に仕へ、どんなにして、はだしのくせに、あの娘がよくもこんなに遠くまでやつて來られたかも知つてゐることだらう。あの娘はわたし達から、自分の力を得ようとしてはいけないのだよ。あの娘の力は、あの娘が人なつてくつて無邪氣なところにあるのだよ。もしもあの娘が自分で雪の女王のところへ出かけて行つて、ガラスのかけらをカイから取り出すことが出来ないやうなら、ましてわたし達の力に及ばない事さ。」

ここから二哩ばかり行くと、雪の女王のお宮の入口に出るから、お前はそこまであの女の子を運んで行つて、雪の中で赤い實をつけて茂つてゐる、大きな藪のところにおろしてくるがいい。無駄な口をきかないで、大いそぎで行つて、また、ここへ歸つておいで。」

それから、フィンランドの女は、ゲルダを馴鹿の背中にのせました。そこで馴鹿は、一生けんめい早く走つて行きました。

「あゝ、わたしは長靴もついて來たのよ。手袋もついて來てしまつた。」と、ゲルダは叫びました。

間もなくゲルダは、身を切るやうな寒さを感じました。でも馴鹿は決してとまらうとはしませんでした。それは赤い實のなつた藪のところへ來るまで一いきに走りつゞけました。そしてそこでゲルダをおろして、口のところにキスしました。大粒のきら／＼光る涙が、馴鹿の顔を流れました。それから、それは出来るだけ早く歸つて行つてしまひました。可哀さうにゲルダは、靴もはかず手袋もはめずに、さびしい寒いフィンマルクの、まつたどなかに突つ立つてゐました。

ゲルダは一生懸命にかけ出しました。すると雪の大軍が、向うからおしよせて来ました。けれどもその雪は空から降つて来るのではなくて、北極光に照らされてきら／＼輝きながら、地面の上をとびまはつてゐて、近くに來れば来るほど形が大きくなりました。ゲルダはまだ蟲目がねでのぞいた時、どんなに雪が大きく美しく見えたかを覚えてゐました。けれどもこの雪は、ほんたうに、もつと長く、もつと、もつと、恐しく見えました。この雪は生きてゐたのでした。この雪は雪の女王の哨兵でした。ずぶん變てこな形をしてゐました。大きくて醜い、やまあらしのやうなものもあれば、鎌首をもたげて、とぐろを巻いてゐる蛇のやうな格好をしたのもあり、毛のさかさに生えた、太つた小熊に似たものもありました。それはみんな目のくらむやうに白い、生きた雪のかたまりでした。

そこで、ゲルダはお祈りを始めました。寒さは大層ひどかつたものですから、ゲルダは自分の息を見ることが出来ました。それは口から煙のやうになつて出て行きました。息は、段々濃くなつて、小さな、いくつもの天使になりましたが、それは地面につく度にどんどん大きくなつて行きました。そして天使は皆、頭には冑を戴き、手には楯と槍とを持つてゐました。天使の

数は、ふえるばかりでした。そして、ゲルダがお祈りを終つた時には、立派な軍勢がゲルダのぐりに立つてゐました。そして槍を振つて恐しい雪の兵隊を打ちたふすと、みんなちり／＼になつてしまひました。そこでゲルダは勇氣を出して、元氣よく進んで行くことが出来ました。天使達はゲルダの手と足をさすりました。するとゲルダは前ほど寒さを感じなくなりました。そして雪の女王のお城をめがけて急ぎました。

ところでカイは何をしてゐたでせう。カイはたしかに、ゲルダのことなどは少しも考へませんでした。だから、どうしてゲルダが雪の女王の御殿の前に来てゐるなんてことを考へつきませう。

第七のお話

雪の女王のお城での出来事と、その後の話。

雪の女王の御殿の壁ははげしく吹き積る雪から出来てゐて、窓や戸口は身を切るやうな風で出来てゐました。そこには百以上も廣間が順に並んでゐて、みんな雪に吹きつけられてゐまし

た。廣間の中で一番大きいものは、數哩にわたつてゐました。強い北極光がこの廣間をも照してゐたので、その大きな、がらんとした、氷のやうに冷たい廣間は大層綺麗に光つてゐました。楽しみといふものはまるでないところでした。あらしが音楽を奏で、熊達があと足で立ちあがつて、氣どつて踊るダンスの會もなければ、若い白狐の貴婦人の間に、さゝやかな茶話會が開かれるなんてことも、決してありませんでした。雪の女王の廣間は、たゞがらんとして、だゞつびろく、そして寒いばかりでした。北極光はたゞもうあか／＼と輝いてゐたものですから、それをはつきりと見ることが出来ませんでした。この大きな、がらんとした、雪の廣間のまんなかに、何千といふ數に割れた、凍つた湖水のかけらがありました。割れた湖水は皆、同じやうな形をしてゐましたので、立派な美術品を見るやうでした。この湖のまん中に、内にゐる時は雪の女王が坐つてゐました。そして、自分は理性の鏡の中に坐つてゐるのだ、この鏡ほどのものは、世界中捜してもないといつてゐました。

カイは寒さのために、全身、紫色といふよりは、ほとんど黒くなつてゐました。それでゐてカイは寒さを感じませんでした。といふのは雪の女王がキッスして、カイの體から、さむさとを

つてしまつたからです。そしてカイの心臓は氷のやうになつてゐました。カイはたひらな幾枚かの鋭い氷のかけらを、あつち、こつちに運んで、色々にそれを組合せて、何か作らうと思ひました。まるでわたし達が、積木を重ねてむづかしい物の形を作らうとするのと同じでした。カイもなか／＼見事な形を作りました。それは氷の智慧遊びでした。カイの目には、これらの物の形はこの上なく立派な、世の中で一番大切なもののやうに見えました。それはカイの目に刺さつた鏡のかけらのせゐでした。カイは字を作らうと思つて、氷のかけらを並べましたが、自分が作りたいと思ふ字、即ち、「永遠」といふ字をどうしても作ることは出来ませんでした。でも雪の女王はいひました。

「もしお前に、その字を作ることがわかれば、自分の體が思ふやうになるよ。さうしたらわたしは世界全體と、新しい襪靴を一足あげよう。」

けれども、カイには出来ませんでした。

「これからわたしは温かい國々へ急いで行つて來よう。そして黒い鉢をのぞき込んで來てやろう。」と雪の女王はいひました。黒い鉢といふのは、火をはいてゐるエトナの山と、ヴェスヴィオ

の山のことでした。「わたしは少しばかりそれを白くしてやらう。葡萄やレモンを、おいしくするためには、さうしなければならぬから。」

かう言つて雪の女王は飛んで行つてしまひました。そしてカイは、たつたひとりぼっちで、何哩といふ廣さのある氷の大廣間で、氷のかけらを見つめて、じつと考へこんでゐました。カイはまるでじつとしたまゝ動かすにゐましたから、人はカイを凍りついて、死んでしまつたのだと思つたかも知れません。

その時ちやうど、ゲルダは大きな門を通つて、その大廣間にはいつて來ました。そこには、身を切るやうな風が吹きすさんでゐましたが、ゲルダが夕のお祈をあげると、眠つてしまつたやうに靜かになつてしまひました。そして、ゲルダはいくつもの、寒いがらんとした廣間をぬけて、とうとうカイを見つけました。ゲルダはカイを覺えてゐました。で、いきなりカイの首すぢめがけて飛びかゝつて行つて、強く抱きしめながら、

「カイちゃん、好きなカイさん。これでやつとわたしはあなたを見つけたのよ。」と叫びました。けれどもカイは少しも動かすに、じつと冷たくなつて坐つてゐました。そこでゲルダは熱い

涙を流して泣きました。それはカイの胸の上に落ちて、心臓の中まで浸みこんで、氷のかけらを溶かして、そして心臓のなかにあつたガラスのかけらをなくなつてしまひました。カイはゲルダを見ました。ゲルダは歌を歌ひました。

うつくしきばらはたのし。

イエスのめぐみはさらにたのし。

するとカイはわつと泣き出しました。カイがあまりひどく泣いたものですから、ガラスの刺が目から出てしまひました。するとカイは、それがゲルダであることがわかつたので、大喜びで聲を上げました。

「ゲルダちゃん。ゲルダちゃんだつたの。あなたは、今までどこへ行つてゐたの。そしてまた、ぼくはどこにゐたのでせう。」かういつてカイは、そこらを見廻しました。「ここは、すゐぶん寒いんだあ。なんて大きくつて、がらんとしてゐるんだらう。」

そしてカイはゲルダにかじりつきました。ゲルダは嬉しまぎれに泣いたり笑つたりしました。氷のかけらまで、よろこんで踊り出しました。そして疲れてまた倒れてしまつた時、氷のかけら

はひとりでに、もしカイがその字が作れたら、カイが自分の體を思ふやうにすることが出来るやうにしてやらう。そして楯靴も、世界もやらうと、雪の女王がいつた字の形を作りました。

ゲルダはカイの頬にキッスしました。すると見る／＼美しくなりました。またゲルダはカイの目にもキッスしました。するとそれはゲルダの目のやうに輝き出しました。それからゲルダはカイの手だの足だのにキッスしました。これでカイは、もとのやうに快活になりました。もうかうなれば雪の女王が歸つて来ておかまひません。女王がそれが出来れば許してやると言つた字が、びか／＼光る氷の文字で、立派に書かれてゐたからです。

それから二人は手を取り合つて、その大きな氷のお宮から外へ出ました。そしてうちのおばあさんの話だの、屋根の上の薔薇の事などを語り合ひました。二人が行つたところには、風も吹かず、日の光が輝いてゐました。そして赤い實のなつた、あの藪のある所に來た時、そこには馴鹿が二人を待つてゐました。その馴鹿はもう一匹の若い馴鹿を連れて來てゐましたが、その若い方は、子供達に暖かい乳を與へ、口の上にキッスをしました。それから二匹の馴鹿は、カイとゲルダをのせて、まづフィンランドの女のところへ行きました。そこで二人は、あの熱い

部屋で十分體を温めて、内へ歸る道を教へてもらひました。それからこんどは、ラップランドの女のところへ行きました。その女は二人に新しい着物を作つてくれたり楯を揃へてくれたりしました。

馴鹿と、もう一匹の馴鹿とは、二人のそばについて、國境まで來てくれました。そこでは初めて、若草が芽を出してゐました。カイとゲルダは、そこで二匹の馴鹿と、ラップランドの女に別れました。「さやうなら。」とみんなはいひました。そして初めて、小鳥が囀り出しました。森には青々した草の芽が一杯にふいてゐました。その森の外には、美しい馬に乗つた若い娘が、赤いびか／＼する帽子をかぶり、鞍にピストルを二挺つけて、こちらにやつて來ました。ゲルダはその馬を知つてゐました。それはゲルダの金の馬車を引つ張つた馬であつたからです。そして、この娘は追剝の娘でした。この女の子は、もう内にゐるのがいやになつて、北の國の方へ行つて見たいと思つてゐました。そしてもし北の國が氣に入らなかつたなら、どこかほかの國へ行つて見たいと思つたのでした。この娘は、すぐにゲルダに氣が付ききました。ゲルダもまたこの娘を見つけてきました。そしてもう一度會へた事を心から喜びました。

「もし、あなたは、ぶらつき屋の天才ですね。一體あなたなどのために、世界の果まで捜しに行つてやるだけの値うちがあるかどうか、知りたい位ですわ。」とその娘はカイにいひました。けれどもゲルダはその娘の頬を軽く打ちながら、王子と王女とはどうなすつたかと尋ねました。

「あの人達は外國へ行つてしまひました。」と追剝の娘が答へました。

「けれども、鳥はどうして。」とゲルダは尋ねました。

「まあ、鳥は死んでしまひましたよ。牝の鳥は、やもめになつて、片方の足に、黒い毛糸の襷章をつけて、大へん怨めしうに、泣言を言つてゐるとの話ですが、でも、それは噂だけでせう。こんどはあなたが、どんな旅をしたか、どうしてカイちゃんをつかまへたか、話して下さいな。」と娘がいひました。

そこで、カイとゲルダは、二人の話を聞かせてやりました。

「手つとりばやくさ。」と追剝の娘が申しました。

そして、その娘は二人の手を取つて、もし二人の住んでゐる町を通ることがあつたら、きつ

と二人を訪ねようと約束しました。それから娘は馬を急がせて、どことも知らず出て行きました。でも、カイとゲルダとは手を取りあつて進んで行きました。二人は行けば行くほど、段々そこらが春めいて来て、花が咲いて、青葉が茂りました。お寺の鐘が聞えて、二人は尖つた高い塔と、大きな町が見えて来ました。それこそ二人が住んでゐた町でした。そこで二人は、おばあさんのところへ行つて、梯子段をあがつて、部屋へはいりました。そこでは何もかも、いつもと變つては居りませんでした。大きな柱時計は、カチカチと時を刻んで、針は廻つてをりましました。けれども二人は、いくつもの部屋を通りぬけた時、自分達がもう大人になつてゐることに気がつきました。表の屋根の樋の上では、ばらの花が咲いて、開いた窓から家の中を覗きこんでゐました。そしてそこには、子供の椅子が置いてありました。カイとゲルダは、めい／＼の椅子に腰をかけて手を握りあひました。二人はもう、重苦しい夢のやうな雪の女王のお宮の、寒い、がらんとした莊嚴さを忘れてしまひました。おばあさんは、神さまのうら／＼かな日の光を浴びて、「爾曹、もし、嬰兒の如くならずば、天國に入ることを得じ。」と、高らかに、聖書の一節を讀んでゐました。

カイとゲルダとは、お互に目と目を見合せました。そしてすぐに、
うつくしきはらはたのし。

イエスのめぐみはさらにたのし。

といふ讚美歌の意味を知ることが出来ました。

そこで二人は、體こそ大きくなつてもやはり子供で、心だけは子供のまゝで腰をかけてゐました。それは、ちやうど夏でした、暖い、喜ばしい夏でした。

にはとこのおかあさん

或時子供が風邪かぜを引きました。この子は外に出て足を濡らして歸つて来たのです。随分から
からなお天氣の日であつたのに、どうしたのか誰にも想像がつきませんので、とにかくこの子
のおかあさんは子供の着物をぬがせて寢床に入れてやつた上、土瓶を持つて來させて、體のあ
たたまるやうに、にはとこのお茶を一杯こしらへてやりました。ちやうどそこへ平生懇意にし
てゐる人で、この家の一番上の部屋を借りて一人ぼち淋しく暮して居るおぢいさんがたづね
て來ました。このおぢいさんはおかみさんも子供もありませんでしたが、それは小さい子供が
大すきで、随分面白いお話をたくさん知つて居ました。

「まあ、さきにお茶を飲んで、それからお話をうかゞふやうにしたらいいでせう。」とおかあさ
んがいひきました。するとおぢいさんはやさしくうなづきながら、

「あゝ、變つたお話をしなげられるといいのだが。」といつて、「しかしこの子はどこで足
をぬらして來たのだらうね。」とたづねました。

「え、どうしたわけだか一向にわかりませんのですよ。」とおかあさんは答へました。

「お話をしてくれるの。」と子供はたづねました。

「あ、何でもわたしのたづねることにはつきりと返事をしてくれればね。わたしはそれからさきへ聞かなければならないのだよ……お前學校へ行く途中の往來の溝はどの位深さがあるのだね。」

「ぼくの膝の半分の所まであります。深い所に足を入れればね。」と子供は答へました。

「ほら、これで足のぬれたわけがわかつた。」とおちいさんはいひました。「それではお話をしなげなくてはなるまいね。だがお話も種切れだ。」

「すぐ出来るでせう。だつてなんでもおちいさんを見たものがすぐお話になるのだつて、それからなんでも手にさはつたものがお話になるのだつて、おかあさんがいひましたよ。」

「あ、でもそんなお話はつまらないよ。どうしてほんたうのお話は、ひとりで出て來るのだよ。それはわたしの額の所をとん／＼たゝいて、さあ参りましたよといふのだよ。」

「ちきにとん／＼やつて來るの。」と子供がいひました。それでおかあさんは笑ひながら、にはと

このお茶を土びんに入れて、あついお湯をつぎました。

「お話もね。」

「あ、お話がひとりで出て來たらね。でもお話のやつ、なか／＼いばつてゐるのでね、餘程氣が向かないと出て來ないのだよ。まあお待ちよ。」かういひながら、「さあ出て來た。ほらね、もう土瓶の中にお話が出て來たよ。」

かういはれたので、子供は土瓶の方を眺めました。土瓶のふたがひとりでに段々持ち上がったと思ふと、にはとこの花が眞白に、生き生きと中から咲き出しました。やがてその下から長い青した枝が出て、四方八方に腕を出してすん／＼すん／＼大きくなりました。全く見事なにはとこの木で、實際大木といつてもいい位の木が出來たのです。もう寢臺の下まで延びて、カーテンを引き開ける勢でした。まあ、そのいい匂ひといつたらありません。そのきれいな花といつたらありません。さてその木のまん中には、妙なふうをした面白さうな顔付きのおばあさんが乗つて居ました。その着物はにはとこの葉をそつくりのまつ青な色で、白い大きなにはとこの花でへりが取つてありました。ちよつと見て、そのへりがこしらへものだか、生きたほんたう

の葉つばや花であるか見分けがつかない位でした。

「このおばあさんは何といふ名なの。」と子供がたづねました。するとおぢいさんは答へていふには、

「昔のローマ人やギリシヤ人はこのおばあさんを森の魔女の仲間に入れて居た。でもそのわけはわからない。船乗の仲間に行くともつといい名が付いて居て、にはとこのおかあさんと呼ばれて居る。その積りで氣をつけてごらん。まあこの見事なにはとこの木の話を聞いたり、よく様子を見て御覽。

ちやうどこの話の通りの花盛りの大きな木が、若々しい勢で外に立つて居た。それはつまりない百姓屋の裏庭の隅に茂つて居て、その木の下に、ある日の晝過ぎ二人の老人が、それは明るい日なたの中にすわつて居た。それはもう随分年を取つた船乗と、それからも随分年を取つたおかみさんなのだ。この二人はたくさんの孫を持つて居て、もう間もなく金婚式の御祝をしようといふのです。所が二人ともかんじんの結婚した日附をどうしても思ひ出せない。それで、にはとこのおかあさんは木の中に坐つて、をかしくてたまらないといふ様な様子をして居た。ち

やうどここにゐるおばあさんにそっくりなこゝ顔でね。——あたしはあなた方の金婚式が幾日にあたるかよつく知つて居ますよ。と、このおかあさんはいつたが、船乗の夫婦には聞えなかつたらしい。夫婦は昔の話ばかりして居たのだ。

で、おぢいさんの船乗がいふには、

——さうさ、お前覺えて居るかい。わたしどもがまだごく子供で、一しよにかけ廻つて遊んだことを。あれは今わたしたちのゐるこの庭だつたよ。わたしたちはその庭に小さな木を植ゑて、お庭だといつて遊んだのだ。

するとおばあさんは答へて、

——さやうさ、わたしはよく覺えて居ますよ。その木に水をやりましたつけ。その中の一本はにはとこの木でしたよ。それに根がついて、また青い枝を出し、それから大きな木になつて、この通りわたし達がその下に坐つて居るといふわけですよ。

——さうともさ。それからあちらのすみには、水を溜めた事があつた。そこへボートを浮かしたものだ。ボートもわたしのお手製さ。よく走つたものだつた。だがそれから間もなく、こ

んどは自分がよそで船をこぎまはす事になつたのだ。

おばあさんがいつた、

——でもその前にわたし達は學校へ行つて課業を教はりました。それから二人で堅信式をしたのですよ。わたしたち二人とも泣き出しました。でもその晝過ぎには手をつなぎ合つて、丸塔にのぼつて、コーベンハーゲンの町から、海の方まで見はらしましたつけ。それからフリートリッヒベルクへ行つて、王様とお后様が運河を下つておいでになる所を見たのですよ。

——でもわたしはよその海で船を漕がなければならなかつた。それはもう何年も、はるかに遠い海の上でね。

——え、わたし随分あなたの事を思つては泣いたのです。もうあなたは死んで居なくなつて、波にさらはれて深い海の底に沈んでしまつたのかと思ひました。もう幾晩も幾晩も、わたしは起きて風見の鶏が廻つて居るか見に行きました。え、それは廻つて居ましたが、あなたは歸つて来ないので。何でも雨が空から瀧のやうに流れ落ちた事をはつきりと覚えて居ます。手車をひいてごみを取りに来る人が、わたしの爲事をして居る所へやつて来ました。わたしはその

人とごみ箱の所へ行つて、戸口に立つたまま待つて居ました。何といふひどい天気でしたらう。

するとちやうど立つて居る所へ郵便屋が来て、一本の手紙を渡しました。それがあなたから来た手紙でした。まあどの位方々廻つて歩いて居たのでせうね。わたしは封を切つて読みました。と、もうすぐに笑つたり泣いたり、それは全く嬉しかつたのですよ。それにはなんでもあなたがコーフィーの實の生る暖かい國へ行つていらつしやるといふ事が書いてありました、随分たくさん、色々な事が書いてあつて、わたしはそれを讀む間中雨のさあ／＼降る中をごみ箱のそばに立つて居たのです。その時誰かやつて来て、行きなりわたしの體に手を掛けました。

——それでお前はその男に、いやといふ程ひどい平手打を、それは音のする程ひどくくらはせたのだらう。

——わたしそれがあなただといふ事がわからなかつたのです。あなたはちやうど手紙と一しよに着いたのですものね。あなたは随分立派になつて居ました。でもそれは今でもさうですね。長い黄色い絹のハンケチをかくしに入れて、帽子をかぶつておいででした。全く立派でしたよ。それにどうして、品のよかつたこと。

—それから二人は一しよになつたのだね。覚えて居るだらう。それから初めの男の子が生れる。それから續いてマリーに、ニールスに、ペーテルに、ハンス・クリスチャンに、さうだらう。

—さうですよ、そしてみんなそろつて大きくなつて、誰の目にも立派な男になつたのです。

—それからそれらの子供達がこんどは又子供を産む番になる。さうな、あれらは子供の子供だね。それもたちが中々いい。そこで思ひ違ひでないとすると、我々二人が一しよになつたのは今頃の季節であつたと思ふ。

—さうですよ。けふがあなた方の金婚式の當日ですよ。にはとこのおかあさんが二人の年寄りのちやうど間に首を出して言つた。すると夫婦はお隣の人が顔を出したのだと思つて、お互に顔を見合せて、てんでんの手を握り合つた。

—それから間もなく、二人の子供達や孫達がやつて來た。その方は却つてけふが金婚式だといふ事をよく知つて居た。なあにもうその朝みんなはお祝物を持つて來たのだけれども、年をとつた二人は忘れて居たのさ。そのくせ何年も何年もむかしあつた事は一つ一つはつきりと覚えて居るのだ。

そこでにはとこの木は、かんばしい匂ひを送つて、今しがた沈みかけたお日さまは年寄夫婦の顔の上にかどやいたので、二人のほつぺたは眞赤に見えた。孫達の中で一番小さいのがまはりでをどりまはつて、今晚はあつたかいお芋が食べられるからうれしいといつて、はしやいで居た。で、にはとこのおかあさんも木の中でうなづいて、子供達と一しよに萬歳を叫んだものだ。」

「でもそんなのはお話しやあないや。」と話を聞いてしまふと、子供がいひました。

「うん、さうお前は思ふのだね。だがまあにはとこのおかあさんに聞いて見る事にしようよ。」とおぢいさんは答へました。するとにはとこのおかあさんが、

「なる程お話ではなかつたね。でもこれがお話になるのさ。なんでも、ほんたうにあつた事から、一番不思議なお話は出來て來るのですよ。それでなければんにこの通り見事なにはとこの木が土瓶から芽を出すはずがない。」といひました。

かういつておかあさんは子供を寢床から抱き上げて胸の上にかゝへると、花盛りのはとこの枝が二人の廻りをぐる／＼取りまいて、もうまるで木立の深いあづまやの中にはいつたやう

にたりました。するとこのあづまやが二人を乗せたまゝ空の中を飛んで行くのです。そのきれいさといつたらありません。にはとこのおかあさんはさつそくかはいらしい女の子になりました。でもその着物は相變らずにはとこのおかあさんの着て居た、青い地に白い花の附いたものでした。その胸には本物のにはとこの花を附けて、頭にはにはとこの花の冠をかぶつて居ました。その目は随分大きな空色をして居て、いかにもきれいです。娘と男の子はおない年位で、二人はキッスし合つて、同じやうに嬉しさうでした。

二人は手をつなぎあつて、あづまやから出ると、こんどはうちのきれいな花園の中に立ちました。おとうさんの杖が生垣のわきにはひ附けてありました。その杖に命があるやうに子供には思はれました。二人がその杖にまたがると、その磨いた頭は見事な立がみを風になびかせて氣持のいいなき聲を立てる馬の頭になつて、やがて四本のしやんとした足が生え出しました。馬は丈夫で、活潑で、二人はそのせなかに得意らしく乗りながら、草原のまはりをとつとつとかけさせました。萬歳。

「これから二三里かけさせよう。去年行つた事のある華族の別荘の方までかけさせよう。」と男

の子がいひました。

かういつて二人は草原をぐる／＼かけ廻りました。にはとこのおかあさんの形を變へた女の子はその間叫び続けました。――

「さあ田舎へ来ましたよ。御覽なさい、道ばたに百姓家の大きなパン焼のかまどがばか大きい卵のやうに壁の外に突き出して居るでせう。にはとこの木がその上に枝を擡げて、その下で雄雞が雌を追ひ廻して居ます。ほら、あの通りいばつたふうで歩いて居るでせう。こんどはお寺の所へ来ました。お寺は高い小山の上に立つて居て、大きな檜の木が蔭を作つて居ます。その一本は枯れかけて居るのですよ。今度は鍛冶屋の家へ来ました。火が燃えて、はだぬぎの男が槌で打つと、火花が遠くへ飛び散ります。さあ貴族屋敷へ早く行きませう。」

で、女の子が杖の後に乗りながら教へた通りな様々な景色が飛ぶやうに通りました。そのくせ二人はたゞ草原のまはりをぐる／＼かけ廻つて居るのですが、子供にはそれだけの景色がほんものに見えたのです。それから二人は道ばたで遊びました。土をかい、小さい花園をこしらへました。女の子は髪の中からはとこの花をぬき取つてそれを植ゑると、おちいさん達

がさつき話したやうに、昔子供の時したとそつくり同じやうに木が生えました。二人は手を取り合つて、これもおぢいさん達が子供の時分したとそつくり同じやうに出掛けて行きました。でもそれは赤い塔でもなく、フリードリッヒベルグの花園でもありません。どうして女の子が男の子の體に手を掛けると、二人はすん／＼遠く、この國のはるか奥の方までも飛んで行きました。

で春が夏になり、秋になつて、何千と云ふまぼろしの畫が男の子の目にも心にも寫し出されました。女の子は始終歌を歌つて聞かせました。子供は決してそれを忘れないでせう。この旅の間始終、にはとこの木はほんたうにあまいいい香りにほひました。ばらやいき／＼した白樺の木も目にとまりました。でもやはりにはとこの木が一番よくにほひました。何しろその花が女の子の胸のまはりに下がつて居て、飛んで行く途中も男の子は度々それに寄りかゝるやうになつたのです。

「ここは春の美しいこと。」と女の子はいひました。なる程子供達は青々したぶなの林の中に立つて居ました。その足元に麝香草がいい匂ひを振りまいて、薄赤いアネモニーが目覚めるやうな緑の中で、ばつちりと目をあいて居ました。

「あゝ、いい匂ひのするデンマルクのぶな林がいつでも春だといひのだがね。」

「ここは夏がきれいですよ。」と女の子はいひました。

すると二人は武士の時代の古いお城のそばを通つて居ました。お城の高い石垣やとんがつた塔が、運河の水に影を寫して、水の上には白鳥がおよぎ廻つて居るし、古い並木が上から見おろして居ました。畑には麥が、海のやうな波を打つて、小川には黄色い花や赤い花が咲き、垣根には野生の忽布草やにんどうが咲いて居ました。晩方にはまん丸い大きな月が上がつて、牧場の方で枯草のいい匂ひがしました。

「ここは秋はきれいなんですよ。」と娘がいひますと、空が二ばいも青くなり、高くなつて、森は赤と黄と緑のそれは／＼美しい色にかはつて、獵犬がかけ出すし、野の鳥の大きな群が、蔓草が古い石にからみついてゐる、昔の勇士の墓の上を、啼きながら飛んで行きました。濃い藍色の海には一めん白い帆船が浮んでゐるし、穀倉にはおばあさんたちや、女の子や男の子がゐて、大きな桶に、忽布草を摘んでは入れてゐました。若い人達が歌を歌ふと、年を取つた人達は、小人や魔法使ひの昔話をしました。「こんない所はとてもありはしないよ。」

「ここは冬はきれいなものですよ。」と女の子がいひますと、木といふ木はみんな霜をかぶつて、まるで白珊瑚に變つたやうです。雪が足の下できしつて、みんな新しい長靴をはいたやうな心持でした。部屋の中ではクリスマス木の木に明りがついて、贈り物とあふれるやうな喜びがそこにありました。田舎へ行くと、お百姓の家でもたのしうなヴァイオリンの音がして、面白うに笑ひくづれる中で、林檎切りの遊戯が初まつてゐました。で、一番貧乏な家の子供でも、「やはり冬はいいなあ。」と思ひました。

さうです、全く愉快でした。女の子は男の子に残らず見せてやりました。その間じゆうにはとこの木がにほつて、赤い地に白い十字架を書いた旗がひらく／＼ひるがへつてゐました。この旗の下で船乗のおぢいさんは、いつも新しい航海に向つて行つたのです。子供は若者になり、廣い世界へ、それはコーフィの木の茂る暖かい國へまでも行かなければなりません。でもお別れに女の子は胸につけたにはとこの花を取つて、おかたみにそれを若者にやりました。若者はその花を讚美歌の本の中にはさんで、遠い外國に行つて本を開けるたんびに、まづ記念の花の咲いてゐた場所を目に浮べました。よけい長く花を見つめれば見つめる程、花は勢ひづい

て來ました。どうやら故郷の森からかんばしい風が吹いて來るやうな氣がして、花びらの間にはつきりとあの明るい目をした女の子の姿を目に見て、「ここは春が、夏が、秋が、それから冬がそれはいいのですよ。」とさゝやく聲を聞きました。それから後から後からとさまざまなまぼろしが考へるそばからすべり出すやうでした。

こんなふうにして何年も何年もすぎました、で、今は若者もおぢいさんになり、おばあさんのおかみさんと並んで、花の咲いた木の下に坐つてゐます。二人は手をとりあつて、それは昔御先祖のおぢいさんやおばあさんが、人こそちがへやはり庭の外でしてきた通りにして、同じやうに若い時分の事や金婚式の事を話しました。青い目をして髪の毛にはとこの花をさした女の子が、高い木の上に乗つてゐて、二人に向つてうなづいて、「けふがその金婚式ですよ。」といひました。それから冠にさした花を二つぬいてキスすると、はじめの花は銀のやうに光り、次の花は金のやうに光りました。それを年をとつた夫婦の頭の上に一本載せますと、花は兩方とも金の冠に變りました。そこで二人は王様とお后のやうに、そつくりにはとこの木のやうな香りする木の下に腰をかけました。で、おぢいさんはおばあさんに、子供の時間いた通りに、には

とこのおかあさんの話をしますと、お互に何だか随分自分たちのことによく似てゐるなと思つて、取り分けさういふ似た所が一番好きだと思ひました。

そこで木の中の女の子がいふには、

「さう、さういふわけなんですよ。ある人はわたしにはとこのおかあさんといふ名をつけました。さうかと思ふと森の魔女といふ名で呼ばれる事もあります。ほんたうはわたしの名は思ひ出といふのです。ずん／＼育つて行く木の中に坐つてゐるのはわたしです。わたしはずつと昔の事を考へ出して、話をする事が出来るのです。あなたはまだ花をしまつて持つてゐるかお見せなさい。」

そこでおぢいさんが讚美歌の本を開けますと、例のにはとこの花がまるでついこの頃はさんだやうにいき／＼としてゐました。で、にはとこのおかあさん、いや、ほんたうは思ひ出が、聰でうなづきました。金の冠をかぶつた二人の年寄は燃えるやうな夕日の中に坐つてゐました。やがて二人は目をつぶりました、そして、さう、これでお話はおしまひです。

子供は寢床の中で横になりながら、夢を見てゐたのか、お話を聞いてゐたのか、わからなく

なりました。土瓶はテーブルの上のつてゐましたが、にはとこの木がそれから生えてなんぞゐませんでした。おぢいさんはその時お話をしてしまつて、外へ出て行く積りで立ち上がりました。そして出て行きました。

「なんてきれいだったでせうね。おかあさん、ぼくは暖い國々へ行つてゐたのでせう。」

するとおかあさんが答へて、

「あゝ、きつとさうでせうよ。なんでもお茶碗のふちまで一杯にはとこのお茶をついで、二杯までのめば、よその國へ行くといふことですよ。」とかういつて、おかあさんはまた風邪かぜを引き返さないやうにかけ物をよくかけてやりました。「わたしがここにゐてあのおぢいさんと、これはほんたうの話か、それともおとぎ話だらうか話しあつてゐる最中、お前はよく寢込んで居たのですよ。」

「で、にはとこのおかあさんはどこにゐるの。」と子供がたづねました。

「それは土瓶の中にあるのさ。今でもやはりゐるでせうよ。」とおかあさんはいひました。

かゞり針

六二四

或ところに、一本のかゞり針がありました。針は自分ながら大へんきやしやな、きれいな針だと思つてゐました。きつとおれは女の子が縫物につかふ針にちがひないと思つてゐました。「氣をつけてしつかりおさへてゐて下さいよ。おつことしてはいやですよ。うつかり地面にでも落ちた日には、もうめつたに見つかりはしないでせうよ。何しろ、この通り、きやしやなんですからね。」

かゞり針はつまみ上げられながら、指にさう言ひました。

「これく、まあ、さううぬぼれなさんな。」と、指は言つて、針の胴中をむづとつかみました。「ごらんさい、わたしの後からお供がついて来る、この通り。」と、針が高慢らしく言ひました。なるほどさう言へば、針のうしろから、ぞろ／＼糸が長い尾を引いてついて来ました。しかし、その糸には結びたまが拵へてありませんでした。

さて指はその針をどこへ持つて行くかと思ふと、いきなり料理番の女の上靴を突きとほしま

した。その上靴の上側の皮が破れてゐたので、それを縫ひ合せることになつてゐたのです。

「これは下等を爲事だな。」と、針は言ひました。「どうしてわたしにこんなものが突きとほせるものか。あつ、折れてしまひますつたら、折れてしまひますつたら。」

かう言ふ間に、針はほんたうに折れてしまひました。

「だから言はないこつちやない。こんな爲事には初めからむりなんだ。何しろきやしやすぎるんですよ。」と、かゞり針はうらめしさうに言つてゐました。

「いやはや、こいつはもう、全く役に立たなくなつてしまつた。」と、指が言ひました。しかしさう言ひながら、やはり針をしつかり持つてゐなければなりません。と言ふのは、その料理番が、その針の上に封蠟で頭をこしらへて、胸の上の手拭を、それで留めたからでした。

「なるほど、こん度は、えりどめになつたのだな。どうも自分でも、出世するといふことがよくわかつてゐましたよ。やはりそれだけの器量のあるものはいつか世に出ずにはゐないものですからね。」

針はかう言ひながら、おなかの中で、くすつと笑ひました。誰だつて、針が顔に出して笑ふ

ところを見ることは出来ません。針は手拭にぶらさがりながら、さも立派な馬車にでも乗つた氣で、得意になつて、あたりを見廻しました。

「失禮ですが、あなたは金で出来てゐるのですか。大へん美しい御様子ですね。おまけに、頭も借りものでなく、御自分のものらしいですね。その代りずいぶん小さいですね。封蠟をたらしてこしらへたものなどは違つて、今にだん／＼大きく育つて行くに違ひありません。」

かゞり針は、その時お隣りにゐた、これこそほんものゝ襟針を見つけて、こんな風にべらべらおしやべりを始めました。

ところがあんまり圖にのつて體をのり出していく拍子に、針はすつぽり手拭からすり抜けて、ちやうど料理番が洗ひものをしてゐた流しの中に落ちてしまひました。

「なあに、このまゝどこかへ無くなされてしまひさへしなければ、これもちよつと旅行に出たやうなものだ。」

針はこんなことを言つてゐましたが、そのうち、ほんたうに、無くなされてしまひました。「何しろ、わたしはかういふ世の中には、あんまりきやしやに生れすぎたのだ。でもわたしは

自分のほんたうの値うちを知つてゐるから、どんな境遇におちても、びくともしない。」

ほんたうにびくともしないやうな平氣な顔で、針は流しから溝どろの中に落ちました。

そこでかゞり針が相變らず高慢らしい上機嫌な様子でころがつてゐる、その頭の上を、木の葉つばだの、藁くづだの、古新聞のきれつばしだの、いろんなものが遠慮なく流れて行きました。

「どうだ、むやみにあいつらは流れて行くよ。きつと、下にどんなえらい人がねてゐるか知らないのだな。だがわたしは平氣で、びくともしらずに、ここにかうしてねてゐるのだ。ごらん、あの通りだ、葉つばの先生なんども、自分のことより、つまり言ふと葉つばのことよりほかに何にも考へずに、夢中で流れて行きます。こんどは藁くづが通つて行きます。やれ／＼まあ、ずいぶん忙がしさに、ぐる／＼廻りをして流れて行くぢやないか。そんなに自分のことばかり考へるのはおよしなさい。間もなくどこかの石に鉢合せをして、ひっくり返るだらうよ。やあ、あすこに古新聞のきれつばしが泳いで来る。あの上を書いてあつたことなんか、とうの昔に忘れられてしまつてゐたのに、あいつはさも物知りらしい氣取つた様子をしてゐること。

いや、どつこい。わたしだけは相變らずじつとおとなしく、ここに坐つてゐよう。わたしは自分で自分がどんなに美しいものだといふことを知つてゐるのだ。そして、どう身分がかはつても、その美しさに變りつこはありやしないのだ。」

薄ぐらい溝の中で、かゞり針はひとり言を言ひつゞけてゐました。

ある日のこと、このかゞり針のちきそばに、大層びか／＼光るものがやつて來ました。針はきつとこれがダイヤモンドだと思ひました。しかし實さいは塚のかけらでした。それでも暗い中で光つたところを見ると、針はさつそく、そのかけらに話しかけました。そして自分は襟針であると名のりました。

「あなたはダイヤモンドぢやありませんか。」と針は言ひました。

「まあ、そんなものですよ。」と、塚のかけらは答へました。

それからはお互に相手を大層立派なものやうに思ひこんでしまひました。そして、この頃の世の中のことや、世の中のものやうぬぼれてゐることなどを話し始めました。

「一體わたしは、もと、或若い貴婦人の手箱の中に住んでゐたのですよ。その貴婦人は料理番

でしたがね、両手に五本づつ指を持つてゐました。ところでわたしは、その五本の指ぐらゐ、うぬぼれの強い奴を見たことがありませんでしたよ。しかも、その指といふのは、たゞわたしを手箱から出したり入れたりするために、ついてゐるだけのものだつたのですからね。」と、かゞり針が話しかけました。

「すると、その指といふのは、よほど尊い身分のものなのですか。」と、塚のかけらが尋ねました。

「いゝえ、どうして、たゞ高慢な奴で、いばりくさつてゐただけですよ。指の家族はみんなで五人の兄弟同士でした。背の高さこそちがつてゐましたが、揃ひも揃つて、それは高慢ちきだつたのですもの。一番はじめにあるのが拇指で、せいがすんぐり低くつて肥つてゐました。この拇指は、いつも列の先頭に立つて歩いてゐたものです。そして背中にあたつた一つしか節がないので、二重になつておじぎをすることは、とても出來ないことでした。でも、おれが手から切りおとされてしまふと、人間は戦争に出ることができなくなると、拇指は言つてゐました。二番めの喰ひしん坊指は、あまいものや、すつばいものゝ中にとび込んだり、お日さまやお月さ

まを指さしたりしました。この指は人間が字を書く時、ペンを押へる役もしました。三番めの背高指は、いつもによつきり、ほかの指の頭を見おろしてゐました。四番めの金の環指は腰のまはりに金の帯をしめてゐました。さて一番おしまひの小指は、全く何にも爲事はしすに、それを自慢にしてゐました。この五人の指はお互に高慢の言ひ合ひばかりしてゐました。それだから、わたしは逃げて来てしまつたのです。」と針が言ひました。

「なるほど。そこで、ここにかうやつて一人ぼつち光つてゐるといふわけなのですな。」と、塚のかげらが言ひました。

ちやうど、その時に、どつと澤山の水が溝に出て來たので、溝はあふれて、塚のかげらは流されてしまひました。

「あの人も、おしのけられてしまつた。けれどわたしは、ここにじつとしてゐるんだ。わたしはほんたうにきやしやなのだ。それがわたしの自慢なのだ。」と、針はつぶやきながら、得意になつて、くらい中で相變らずころがつたまゝ、いろ／＼と大きなことを考へてゐました。

「わたしがこんなきやしやなところを見ると、どうもわたしは、日の光の生んだ子供ぢやない

かしらと思ふ。ほんたうに、まるで日の光がしよつちゆう水の下までも這ひ込んで來て、わたしを搜してゐるやうな氣がしてしやうがない。あゝ、けれどあんまりわたしがきやしやすぎるために、おかあさんにも、見つけ出せないのかも知れない。もしあの時折れてなくなつてしまつたわたしの目が今もあつたら、泣くことも涙をながすことも出来るんだが。だが、どうしてわたしは泣いたりなんかしてはならない。泣くなどといふことは、見つともいいものぢやない。」

ある日、往來で遊んでゐた子供たちが、遊びあきて、溝をほじくりはじめました。溝の中で子供たちはどうかすると古釘や、銅貨や、そんなものを見つけることがありました。それはすゐぶん汚らしい爲事でしたが、子供たちは、それをまた大層面白がつてゐました。

「あツ、このろくでなし野郎が。」とその時、溝の中の針で腕を刺した子供の一人が言ひました。「わたしは野郎なんて言はれるものではありません。若い貴婦人ですよ。」と、針は不服らしく言ひました。

けれど、誰も針の言ふことなどを聞くものはありませんでした。封蠟がはげ落ちて、針は黒くなつてゐました。しかし黒くなつたせいで針はよけいきれいになつたと、自分では考へました。

「あすこに、卵の殻が流れて来るよ。」と子供たちは言ひました。そして針を卵の殻にしつかりとさし込みました。

「白い壁の中に、色の黒いわたし。ずぶぶんよく似合ふことだらう。これでこそ誰が見ても感心することだらうよ。たゞ、この卵の殻の舟にのつてゐて、舟酔ひさへしなければいいが。」と針は言ひました。

「もし、人間が鐵のやうな強い胃の腑を持つてゐて、自分は並の人間よりも少しでもえらいのだといふ考を忘れなかつたら、舟に酔ふなんてことはありやしない。さあ、舟酔ひなんかなくなつてしまつたぞ。きれいなものは我慢する力もつよい。」

「パチヤン。」と卵の殻は壊れてしまひました。荷車がその上をひいて通つたのです。

「やれ／＼苦しいな。」とかゞり針はため息をつきました。「こりやあやはり舟酔ひだな、あゝ折れる、折れる。」

でもほんたうは針は折れなかつたのです。荷車は上をひいて通りましたが、針はやはり長々とねたまゝ、——いつまでもさうしてゐるでせう。

鐘

夕方、お日さまが沈んで、煙突と煙突の間に雲が金色にかゞやく頃、よく大都會のせゝこましい往來で、あれまた一つ、そらまた一つといふやうに、聞きなれない物音がよくきこえることがありました。それはお寺の鐘のやうでしたが、でも何しろ、ごろ／＼いふ車の音や、がやがやさわがしい大勢の人聲にかきけられて、ほんのたまにしか人の耳にははいりません。それでも、「あれ、晩の鐘が鳴つてゐる、お日さまがかくれる。」とみんなはいひました。

郊外の、あまり家の立てこんでゐない、家と家との間には、庭やちんまりとした畑などのある所では、夕焼の空もまづ／＼美しく見えましたし、鐘の音もすつとはつきりきこえました。そこで聞くとそれはしづかな、むせるやうな木の香りのする奥にあるお寺からでも響いてくるやうでした。みんなはその方角をながめて、おごそかな心持になるのです。そんなことではばらく立ちました。誰いふとなく、「どうもあの森の中にお寺があるやうだね。あの鐘の音色はいかに美しい。一つ出かけて行つて、正體を見届けようぢやないか。」かういつてお金のある人

たちは馬車で、貧乏な人たちは徒歩で出かけました。ところがおそろしく遠い道で、やつと森のとつつきに柳の木立の茂つてゐるところまで来ますと、みんなはべたべたに坐つてしまつて、ついその長い柳の枝を見上げながら、もう森の奥の木蔭にでもはいつて休んでゐるやうに思つてゐました。お菓子屋が町から出かけて来て、テント張の家裏店をそこへ出しました。すると間もなく、もう一人のお菓子屋がやつて来て、それは店先へ看板に鐘をつるしました。それには雨をふせぐためコールターがぬつてあつて、鳴らすにも舌のない鐘でした。さてみんなはそれなり内へ引き上げて歸りましたが、これは仲々小説じみた探検だつたといひ合ひました。中に三人森の奥まで入り込んで見たと主張する人たちがいましたが、そのいふ所では、鐘の音は始終きこえてゐたが、どうも町の方から響いてくるやうに思はれたといふことでした。一人これについて長い詩を發表した人がいましたが、鐘の音はかはいいおさな兒の耳にさゝやく親の聲のやうであつたと書いてありました、それはどんなやさしい調しらべでもこの鐘の音の美しいのには及ばないと書いてありました。

やがてこの事はこの國の王さまのお耳にもはりました、そこで王さまはこの音の出所をた

しかめたものには、よしそれがじつさいの鐘でなかつたにしても、「天が下の鐘撞男」の役をさづけるといふおふれをお出しになりました。

そこでこの名譽にありつきたい所から、大勢の人が森へ出かけて行きました。けれどその中でとにかく何か調査報告のやうなものをおみやげにして歸つて来たのはたつた一人でした。

それによると、これまで誰一人、ほんたうに森の奥まではいつて見たものはなかつたので、やはりその例にもれないものではあるが、まあどうやら、音は或うつろな木の中に住む珍らしく大きな梟が發するものらしいといふことでした。なんでも物しりの梟らしく、始終木に頭をこつ／＼ぶつつけてゐるさうです。が、音は果してその頭から出るものか、うつろな木の中からおこるものか、たしかなことは分からないといふのでした。この報告のおかげでこの人は「天が下の鐘撞男」の役をさづかりました。そして毎年梟について短い研究論文を發表しました。けれども誰一人おかげで賢くなつたものはありませんでした。

さてそれは堅信式の日でした。坊さんはいかにも感にたへたやうなありがたいお説教をしました。神さまの信仰を堅める子供たちは大へん動かされました。子供たちにとつてそれは大事な

一日でした。子供からすぐとおとなになつたのです。いはゞ子供たちの幼い魂は、いきなりすぐと分別のすぐれた人の體にとび込んだといふのでせう。外にはお日さまがきら／＼かゞやいてゐました。堅信式をすませた子供たちは外へ出て行きました、すると森の中から正體のわからない鐘の音が奇妙にはつきりと聞こえて來ました。子供たちはさつそく探検に出かけたくなりました。たゞその中で三人だけのけ者になつたといふわけは、一人の女の子は舞踏服の着だめしに内へかへらなければなりません、この女の子が堅信式にやつて來たのも、この服を着て舞踏會に出るためで、そんなことでもなければむろんもう一年のばす管だつたのです。もう一人の子供は貧乏人の子で、堅信式に出るために服も長靴も宿屋の息子から借りて來たので、約束の時間までにはかへしに行かなくてはならない所から探検の仲間入をこわつたわけでした。さて三ばんめの子供はおとうさんやおかあさんと一しよでなければつして知らない場所へ行つたことのない子でした。で、これまでずつと、おとなしいいい子で通して來たのだし、おまけに堅信式をすませて見ればなほ更のことですから、それを誰もからかふことはならない筈でした。——けれどやはりほかの子供たちはこの子をいくちなしだといつてからかひました。

さういふわけで行かない子が三人ありましたが、その外の子供たちは勇んで出かけました。お日さまがかゞやいて小鳥が歌をうたふと、子供たちもうれしさに歌をうたひながら、手をつなぎあつて行きました。何しろ子供たちの仲間では上も下もありません。それこそ間ちがひない神さまの子供でした。

けれどその内中で一ばん年下の二人がくたびれて町へかへりました。女の子二人は坐り込んだまゝ花環を編みはじめて、それも行きませんでした。さて外の子供たちはれいのお菓子屋が店を出した柳の木の下まで行きますと、「さあ着いたぞ。鐘なんかありはしないのだな。ありやあほんたうはみんなが頭の中でこしらへ上げた想像なのかもしれないよ。」といひました。さういふ傍から、森の奥でれいの鐘がいかにも澄んだおごそかな音を送つて來たものですから、中に五六人はもう少し奥まではいつて見ると言ひ出しました。森はすむぶん深くて、木立はしん／＼と茂つてゐましたから、この上はいるのは仲々臆怖な話でした。車葉草やアネモーネはのびすぎるほど高くのびてゐました。花ざかりの晝顔や草苺は長い環につながつて、木から木へたれ下がつてゐる中で、夜啼鶯は歌をうたふし、日の光がちら／＼面白さうに動いてゐました。これ

は全くいい所にはちがひないのですが、女の子の行くところではありません。さぞ着物に鍵さきのできることでせう。さまざまな色の苔をかぶつた大石がころ／＼してゐて、きれいな泉がそこにふき出してゐました。れいの「こん、こん。」といふ單調な音が妙にきこえました。

「ありやあどうしたつて鐘の音なものか。こりや考へ直す必要があるぜ。」と一人の子供がねころんで耳をすませながらかういひました。そこでこの子はあとにのこつて、外の子供たちだけに行かせました。

子供たちはそのうち木の皮と枝をはいでこしらへた一軒の小家の前へ出ました。一本の大きな野生の林檎の木が小家の上にのしかゝるやうに茂つて、薔薇の花の咲いた屋根の上に神さまの祝福をそゞぎかけてゐるもののやうでした。その長い幹が破風のまはりにからみついてゐるそこに一つ小さい鐘が釣つてありました。

みんなの耳にきこえた鐘はそれでしたらうか。きつとさうにちがひない。誰もこれは同意見でしたが、一人異議をはさむ子がありました。その子にいはせると、この鐘はどうもあまりに小さすぎ、あまりにきやしやすぎでとてもあんな遠方まできこえさうもない、その上あの通り人

を感動させた音色とはまるでちがふといふのでした。この異議をのべたのは王さまの息子でしたが、ほかの子供たちは、なかに身分がいいと思つて、自分だけ利口ぶるのだよといつてゐました。

そこでみんなは王さまの子だけ一人もつと先へ行かせることにしました。で、王子が出かけて行きますと、だん／＼森のさびしさが胸に一ぱい込み上げてくるやうでした。けれどあのみんなを楽しませてゐる小さい鐘の音はやはりきこえてゐました、時おりお菓子屋のテント張の中でお茶をのんでゐる人たちの歌をうたふ聲が風にもつれてきこえました。すると、重苦しい鐘の音は、だん／＼と高くもはつきりもして来て、どうやらオルガンの伴奏でもついでゐるやうな工合でした。そしてそれは左手の、心臓のある側の方からきこえて来るやうでした。するとがさ／＼といふ音が草むらの中できこえて、一人の子供がひよつこり目の前に立ちあらはれました。子供は木靴をはいて、ずぶん短いジャケツを着てゐるので、長い腕がよきんと出てゐました。子供たちはおなじみの間でした。この子供といふのは、内へかへつてジャケツと長靴を宿屋の子にかへしに行かなければならないといふので、さつき一しよに來ることのできな

かつた子でした。その用事もすましてしまったので、いつもの木靴にぼろ／＼服のまゝ一人で森へ出かけて来たのです。鐘の音がいかにも高い重く、調子にひびき出したので、じつとしてゐられなくなつたのです。

王さまの子はいひました。

「ぢやあぼくたちと一しよに行けるね。」

けれど木靴をはいた貧乏人の子供は、大へん恥づかしかつて、ジャケツの短い袖をひつぱりながら、自分にはとてもさう早くは歩けないし、その上どうも大きいもので、乏しいものといふと右手はあるのが極りだから、一つその方向に向つて見たいといひました。

「さう、それだときつと出會へないね。」と王さまの子はいつて貧乏人の子供に目であいさつしました。貧乏人の子供は森の中でも、一ばんくらい、一ばん草深い方へと歩いて行きました、いばらに着物を破られたり、顔や手足をひつかかれてとう／＼血がほとばしりました。王さまの子もやはりところ／＼引つか／＼れましたが、でもお日様はその行く道の上にてつてゐました。わたしたちはこの子の行く方について行つて見ませう。王子はりつばなしつかりした少年でした。

「鐘はきつと見附け出す。世界の果まででも行くぞ。」とこの子はいひました。

見つともない顔をした猿が木の上に集つてゐて、齒をむき出しました。

「あいつをやつつけてやらうか。おい、あいつをやつつけてやらうか。あいつは王さまの子供なんだ。」と猿どもはきやつ／＼いひました。

けれども王子は平氣な顔ですん／＼森の奥ふかく進んで行きますと、そこにはじつにめづらしい花が一ぱい咲きみだれてゐました。血のやうに赤い軸に、花のさいた、明星百合もありました。風でゆれるたんびにきら／＼光る、空色のチューリップもありました。それからしやぼん玉を思ひ切つて大きくふくらませたやうな實の林檎の木もありました。さういふ木が日の光る中でどんな風にかゞやいて見えるか、考へてもごらんない。やはらかに青々と茂つた牧場の草の上には鹿が遊んでゐて、そのぐるりには見上げるやうな榎や山毛櫨の太木が立つてゐました。で、どれか木の皮がわれて落ちてもすると、もうそのすき間に草や青い蔓草が茂つてゐました。それからそこには大きな、おだやかな湖水もあつて、その上に白鳥が羽ばたきしながら泳ぎまはつてゐました。王さまの子はをり／＼立ち止まつて耳をすませました。どうも鐘の音はこの

しづかた湖水の底からひゞいてくるやうに思はれました。けれどやがてまた、やはり湖水の中ではなく、すつととほい森の奥からひゞいてくるのだといふことを知りました。

もうお日さまが沈んで、空一面が火のやうにかつと赤くなりました。森の中は神々しいくらいしづかでした。王さまの子は膝をついて、晩のお祈りの歌をうたひました。そしてかういひました。

「どうしてもさがすものは見つからない。お日さまはしづみかけてゐる、夜は來かけてゐる。くらい夜が來かけてゐる。でもまだきつとすつかり落ちきらないうちに、まあるいまつ赤いお日さまの姿を見ることができさうなものだ。あの大きな木の立つてゐる一ばん高い岩の上のぼつて見てやらう。」

かういつて子供は蔓草や、木の根につかまつて——水蛇がのろ／＼してゐたり、蟻アリがころころ鳴き立てゝゐるしめつぼい石をよぢのぼつて——とう／＼日の落ちきらないうちに岩の天邊てんぺんまでのぼりました。その高みから見おろしたけしきのすばらしさといつたらありません、海が——果てしれず大きな、きら／＼しい海が、その長い波を岸にむかつてぶつつけてゐる姿が

目の前に長々とあらはれました。そしてはるか向うの海と空がたぎ合はさたつ邊におさ日まが輝いて、大きな神さまの聖壇のやうに、世界中がたゞもえ立つやうな色の中にまぶしくとけ込んでゐました。そして森もうたへば海もうたふし、子供の胸も一しよに歌をうたひ出しました。宇宙全體は一つの果てしもなく大きな神聖なお寺で、木立や雲は柱で、花や草はピロッドの掛物ですし、そして天はそのまゝに大きな圓天井で、やがてお日さまの光が薄れてゆくと、空の上の赤い色もさめて行きました。その代り何百萬といふ星が光り出して、何百萬とないダイヤモンド燈をともしました。王さまの子は空にむかつて、森にむかつて、それから海にむかつて兩腕をのべました。——そのとたん、右手の道をとほつて、ぼろ／＼の服に木靴のまゝ、貧乏人の子供がでて來ました。この子は自分のえらんだ道を歩いて來て、やはり王さまの子がついたと同じ場所へ同じ時間についたのです。二人はお互に駆けよつて手と手をつなぎ合ひながら、自然とそれから詩の大きな會堂の中に立ちました。頭の上にはどこともしれず目に見えない神聖な鐘が鳴り出しました。めぐまれた靈たちは、その鐘のぐるりとびまはりながら、歡ばしいハレルヤを聲かぎりうたひたゝへました。

おばあさん

六四四

おばあさんは随分年を取つてゐました。それはたくさんな皺で、髪はもう残らず白髪になつてゐましたが、両方の目だけはまだ星を二つならべたやうにかゞやいてゐて、それをじつと見つめると、よけい美しくも、よけいやさしくも見えて、たのしい心持になるのです。おばあさんはまたそれは面白いお話を知つてゐました。そして大きなくゝ花のついた着物を一枚もつてゐましたが、それこそしゆうくゝ音のする重い絹のきれで出来てゐました。おばあさんはたくさん物を知つてゐました。なにしろおとうさんやおかあさんよりずっと前に生まれてゐるので、から、むろんその筈でせう。おばあさんは厚い銀の飾のついた讚美歌の本をもつてゐて、それを随分よく讀みました。その本の中に、一輪の薔薇が押し花になつて、からくゝにかはいたのはいつてゐました。それはおばあさんの前のコップの中にある薔薇のやうにきれいでありませんが、でもおばあさんはさもくゝなつかしさうに、この薔薇に笑ひかけて、いつか目の中に涙を浮べてゐました。何だつておばあさんは古い本の中でしほれてゐるばらの花なんぞをそん

なふうにして眺めるのでせう。あなたはわかりますか。いつもおばあさんの涙が花の上にかゝるたんびに、花の色は生々となり、やがて花びらがふくれ出して部屋中いい匂ひが溢れだします。すると方々の壁が霧のやうに消えてなくなり、ぐるりは青々とした見事な森にかはつて、お日様が葉と葉の間からくゝ光ります。で、おばあさんは、さうです、おばあさんは見ちがえるほど若くなり、金茶色の巻毛に、眞赤なまあるい頬べたをして、きれいな、かはいらしい娘になります。それはどんな薔薇の花だつて及ばない位です。でもやさしい、かゞやくやうな目だけがやはりおばあさんの目だと思はれました。そのそばには一人、若い丈夫さうなきれいな男の人が腰をかけてゐます。その人はおばあさんの手に薔薇の花を渡しますとおばあさんはにつこりしました——こんなふうにおばあさんの笑ふことはないのです。——さうです、その笑ひが口もとにたゞよつてゐます。さてやがてその人も出て行きます。そこでこの人についての様々な思ひ出や様々の出来事が消えて行きます。きれいな男の人は行つてしまつて、薔薇の花は讚美歌の本にはされました。で、おばあさんは——さうです、おばあさんはまた相變らずもとおばあさんになつて、本の中にはさんである枯れ花を眺めてゐるのです。

おばあさん

六四五

今、そのおばあさんも死にました。——おばあさんは安樂椅子に腰をかけて、ある長い面白いお話をしてゐました。

「さてこれでお話もおしまひだよ、わたしは大へん勞れた。少しとろ／＼休ませておくれ、」とおばあさんはいひました。で、仰むけによりかゝつて、靜かに呼吸をしながら眠りました。でもその呼吸は段々靜かになつて、その顔には幸福と平和があふれ、それはお日様の光がその上にさし込んで来るやうでした。その時、

「おなくなりのやうです。」とみんなはいひました。

おばあさんは黒い棺の中に入れられて、眞白な麻のきれに包まれたまゝ横になりました。きれいな顔でしたが、目はつぶつてゐました。でも皺はなくなつてしまつて、口元にかすかな笑みを浮べてゐました。おばあさんの髪の毛は銀を植ゑたやうに眞白で、神々しい位でしたが、死人の顔付には恐れといふものゝ影もなく、やはり人のいいかはいらしいおばあさんでした。讚美歌の本はおばあさんのお望みで頭の下に置いてありました。薔薇の花もそのまゝ古い本の中にはさまつてありました。かうしておばあさんはおとむらひをすませたのです。

そのお墓の上に、墓地の塀のすぐ下にびつたりよせて一本の薔薇の木を植ゑました。それは眞盛の花で、夜啼鶯がその上で歌を歌ひ、お寺からは死人の頭の下の本にのつてゐる一番美しい讚美歌をオルガンで弾く音が傳つて來ました。月はちやうどお墓の中にさし込んでゐましたが、でも死人はその中にはゐないのです。子供達は誰でも夜平氣ででかけて行つて、墓地の塀わきの薔薇の花を摘む事が出來ました。死んだ人達は自分達がちよろ／＼墓場にあらはれたなら、さぞびつくりするだらうといふことをわれ／＼この世の者よりもすつとよく知つてゐました。死人達はわたしたちよりもすつと人がいいのですから、けして出ては來ません。棺の上には土があり棺の中にも土があります。讚美歌の本はその残らずのページと一しよに、塵に還りました。薔薇の花もその一切の思ひ出と共に塵に還つてしまつたのです。でもやがてその上に新しい薔薇の花は咲き、その上に夜啼鶯も歌を歌へば、オルガンも調子をあはせるのです。おばあさんはあのやさしい、いつまでも美しい目と一しよに何かにつけて思ひ出されます。目はけつして亡びる事がないのです。わたしたちの目は、やはりおばあさんを、あの眞赤な今ではお墓の中の塵になつてゐる薔薇の花を始めて接吻した時と變らない、若い美しい姿のまゝで見えてゐるのです。

すだまの丘

大きなとかげが五六匹、古い木のわれ目にちよろ／＼とかげ込んでみました。とかげ同士はとかげの言葉を話し合ふので、お互のいふことはよくわかつてゐました。

「すだまの丘では何のさわぎをやつてゐるのだらうね。」と一匹のとかげがいひました。「ごろごろ、がら／＼、大へんなさわぎぢやないか。二晩といふもの、わたしはまんじりともしやしな。おまけに齒がいたみ出したやうだ、何しろまるでねむらなかつたのだからな。」

「何かあるのだね。」ともう一匹がいひました。「丘は一番鶏のなくまで四本の赤い枕の上に立つたまゝ中はがらん洞になつてゐる。足音のどん／＼する所では、すだまの女たちが變つた踊をならつてゐるのだ。何かあるにちがひないよ。」

すると三ばんめのとかががいひました。「さうだよ。わたしは友達のみみずにきいたのだ。みみずは丘の中から出て来たばかりなのだ。毎日毎晩あそこの地の下をせりまはつてゐたのだからね。あいつはいろ／＼のことをきいて来た。あいつ、かはいさうに、かいつも盲目なんでね、

その代り立聞したり側聞したりして何かをすつかりのみ込んでしまふのだよ。なんでもすだまの丘にお客がある筈になつてゐる。身分のあるお客だといふがどういふ連中だか、みみずもそれまではいひもしないし、いへもしないのだらう。何でも鬼火の仲間はこのらず狩り出されて、焚松行列をやるしたくをいひつかつた。それからすだまの丘にあふれるほどしまつてある金や銀は、月明りでみがいて並べられるといふことだ。」

「だがそのお客といふのは一體何者だらう。何事がはじまるのだらう。おや、なんだかぶん／＼、ぶつ／＼いつてゐるやうだな。」かう蜥蜴たちはみんなでいつてゐました。

さういふとたん、すだまの丘の口が開いて、一人の年をとつた妖女が背中だけ素裸で、その代りあとはあくまで立派に飾つた風で、中から爪先でちよ／＼歩いて出て来ました。これは妖精の老王の家の取締でした。王さまの遠縁にあたつてゐて、額に琥珀色のハート形をつけてゐました。妖女の足はそれはきやしやで、——パタ——パタ——パタ——パタ——と、それは器用に爪先で地を拂ふやうにして、まつすぐに沼の中の夜鴉のところへと出て行くのでした。

そこへ行つて妖女はいひました。「すだまの丘でおまねきするのですよ。しかも今夜ですわ。そ

の代り大へんな御用を達してもらはなくてはならないのですよ、お客さまの世話をして貰ひたいのですよ。お前さんは自分で宴會をしない代り、これだけの世話はしてくださなくてはね。りつばな身分のお客さまたちが見えるのですよ。それは仲々權式のある魔法使ひの方なんです。よ。ですから老王さまが、何でも精々威勢を見せつけた方が都合がいいといふ思召なんです。」

「誰が招ばれるのだね。」と森の鴉がたづねました。

「それは大舞踏會の方へは、どんな人だつて来るでせう。人間だつて来るかもしれないわ。それは寝ながら物をいつたりするか、何かわたし達のするやうなことがやれさへすればね。でも大宴會は粒選りのお客ばかりで、一等身分の高い人たちだけが招ばれるのです。わたし王さまとこれで長いこと議論をして来たのですよ、わたしの考の通りにすると、幽霊仲間までも入れる方がいいといふのです。」

第一番に海の男とその娘さん達はぜひ招待しなければなりません。もつともあの人達としては水つ氣のない陸の上はうれしくなくてせうけれども、まあそのかはりせい／＼お客さんがぬれた石の上にかけられるやうにするなにかいい工夫がきつとあるだらうと思ひます。ですから

まあこんどはいやだとは言つて来ないだらうと思ふのですよ。あの尻尾のある小人頭のおぢいさんたち、水の精、一寸法師も招ばなくてはならないし、どうもわたしの考では人狼、骸骨馬、それからお寺の幽霊などもはぶくわけには行くまいと思ふのですよ。もつともあの連中は坊さん方の領分ですが、でもそれはお役目の上の事だし、わたし達とは切つても切れない親類仲間、ちよい／＼たづねて来るのですからね。」

「よし。」と夜鴉がいつて、お客様を呼びにさつそく飛んで行きました。

妖精の娘達はもうすだまの丘に出て舞踏をしてみました。それは露と月の光で織つたショールを器用に使つてをどるのです。さういふ事の好きな人達にはきつと随分面白い見ものでせう。すだまの丘のまん中には大きな宴會場が美しく飾られて立つてみました。牀は月の光で洗ひ清められ、壁には魔法の油をぬりましたから、まるでチューリップの葉のやうにきら／＼光りました。炊事場の方ではたくさんの蛙の貯藏品がお皿にもられてゐるし、かたつむりの殻には子供の指のつめものをして、菌の種のサラダだの、しめつた二十日鼠の口だの、毒人蔘だのがありました。お酒のかはりの飲物は、沼の女のかもした混合酒や墓穴の天井からした／＼つた硫黄酒な

どでした。どれもこれもめづらしい御馳走ばかり、その後へ錆釘だの、お寺の窓ガラスなどが食後のお菓子に出るはずでした。

六五二

老王は金の冠を折れた石筆のくづで磨かれました。それは凝灰石の石筆で、どうして凝灰石の石筆を手に入れるなどは妖精王でも中々容易なことではなかつたのです。寢室の戸にはカーテンを掛けて、かたつむりの角でとめました。いやはや、全くがやく、ぶつ、ぶつ、さうさうしい事でした。

「さあこれから後は、馬の毛と豚の毛を振り蒔けばいいのだ。それでわたしの言ひつかつた爲事はおしまひだ。」と年寄の妖女がいひました。すると王様の娘の中で一番小さい子が、

「あのねえ、おとうさま、もうこれでこんどのお正客様はどなたか聞かして頂けるのでせう。」といひました。

「うん／＼。」と王は答へました。「それではいつてきかせる事にしよう。娘のうち二人は御婚禮に出る用意をしておかなければならない。二人はきつとお嫁に行くときまつてゐる。あのノルウェーの國に住む山の小人の老人は、古いドウフレの巖に住居をかまへて、焼巖の城と金の鑛山

をたくさん持つてゐる、いづれもどうして世間で思ふやうなものではない、立派なねうちものだが、この老人が二人のむすこを連れてお嫁をさがしにやつて来る。どうして、老人は生粹のノルウェー人で、愉快な氣の置けない正直な老人だ。わたしはずつとごく若い昔義兄弟の盃を取りかした時分から知つてゐるのだ。その頃あの男はお上さんをさがしにこゝまでたづねて来た。お上さんはもう死んでしまつたが、あれはミョーエの島の巖の王様の娘であつた。よくいふ通りあの島の名物のクライデ巖で老人はじつさいお上さんを見付けたのだ。あゝ、わたしはあの北の國の小人のちいさんに早くあひたくてしかたがない。なんでも世間のうはさでは息子といふのはどうやら性のわるい、かうまんな人間だといふが、多分悪口であらうし、それにしても年を取れば段々よくなるに違ひないと思ふ。まあお前達、さういふくせがあるかどうか實地でためして見るがよい。」

「で、いつおいでになるの。」と一人の娘がたづねました。

「それは天氣次第さ。」と妖精王は答へました。「なにしろ儉約な連中だといふ事は船でやつと來るといふこともわかる。陸からスウェーデンを通つて來たらよささうなものだと思ふが、老人

どういふものかきらひなのだ。なにしろ時間なんといふ事をかまはずに旅行をするのだからとてもたまらないよ。」

その時ふと鬼火が二人飛んで来ました。一人の方が足が早いので一足先になりました。「いらつしやいました。いらつしやいました。」と鬼火どもが叫びました。

「わたしの冠をくれ。それから月の光の中に坐らせてくれ。」と王様がいひました。娘達はシールをひろげて、地びたに平伏しました。

そこへ白髪頭のドーフルの小人王が、氷の塊と磨いた縦の種でこしらへた冠を頭にかむつて、熊の皮の外套に防水靴をはいてやつて来ました。息子達はそれとは違つて、襟巻もせずスコットランド服一枚で寒さにめげない、強さうなやうすでした。

「これが丘だといふのかい。ノルウェーではこんなのは穴といつて居るぜ。」と若い方の息子がいつて、すだまの丘を指さしました。

すると老人が、

「これ、これ。穴はおりるものだ、丘は上がるものだ。お前達は顔に目がないのか。」

さてみんなはすだまの丘にやつて来ました。なる程立派なお歴々揃ひだと思ひました。しかも風にも運ばれて来たかと思はれる程の早さで、みんな一しよにやつて来ました。でもめいめいに出た御馳走も立派な物でした。海のお客様達は大きな水桶につかつたまゝ食卓につきましました。これではとんと家にゐるやうなものだとみんないひました。みんな食卓の作法はよく守りましたが、たゞ例のノルウェーの山から来た小人の息子二人だけは兩足を皿の上へつき出して、これで作法にかなつてゐると思つてゐました。

「お前達足をひつ込めなさい。」と小人のおぢいさんがいひました。それでやつとしぶくながら足を引つ込めました。二人はまたお隣の貴婦人達を縦の種でくすぐつたりしました。それから窮屈だといつて長靴をぬいで、それを貴婦人達に持たせたりしました。しかしおとうさんの方はさすがにまるで違つてゐました。この老人はけはしいノルウェーの岩の話や、泡をふきながら雷の鳴るやうに高い音をたて、烈しくほとばしり落ちる瀧の話をしました。泉の精が金の堅琴を奏でると、たぎり落ちる水に逆らつて瀧上りをする鮭の話もしました。すみ切つた冬の夜橋の上でベルが鳴り、若者達が火のついた焚松を持つて、すべくした氷の上を駆け歩く話、

氷がいかにも透明なので、足の下の魚が驚いて逃げる所が見える話もしました。それは話してゐるうちにまさしくとその有様が目に見え耳に聞えるやうでした。水車のかたことまはる音がして下男や女中達が歌をうたふ聲がきこえ、田舎踊ををどる有様が目に見えるやうでした。やあ、いきなり、小人の老人は年寄の妖女をつかまへて頬すり——といひたければそれでもいいが、じつはしたゝかに音を立てたキスを與へました。そのくせこの二人は一向親類同士でもなんでもなかつたのでした。妖精の娘達はそこで舞踏をすることになりましたが、ほんの足踏をするだけの簡単な舞踏でした。さてその次にむづかしい、技術舞踏、一名「舞踏外れの舞踏」といふ一番が初まりました。驚いたものです、見る／＼妖女達の足はずん／＼長くなつて、どこが初まりでどこがしまひだかわからないやうになりました。脛と腕の區別もつかないやうになりました。なんでも風の中で粉雪がくる／＼廻つてゐるやうなもので、あんまりくる／＼目まぐるしく廻つたものですから、骸骨馬などは氣分が悪くなつて、途中迄しなければならぬといふ始末でした。で、頭の白い小人のおぢいさんは、

「ふう、どうも驚いた、足藝の妙に達したといふものでせうな。しかしあんなふうにくむらが

へりや、つむじ風の舞踏以上に何かまだおできかなといひました。

「それは追々お目にかけますよ。」と王様はいつて、一番年下の娘を呼びました。この娘は月の光のやうにきれいで、しとやかで、きやうだい中での美人でした。娘は白い棒を口にくはへて消えてなくなりました。これが一つの藝でした。

でも小人の老人はこんな藝當をする女を、自分のお上さんにしても、息子のお嫁にしても、爲方があるまいと思ひました。

こんどはほかの娘が、體を二つにわけて、影と形のやうになつて歩いて見せました。これなどはとても小人こびとに出来ない藝でした。

三番目の娘の藝は、大分風變りなものでした。この娘は沼の魔女の酒造所であつて來たといふので、榛の木の瘡に光蟲をまぜて酒を造ることを知つてゐました。

「この子はいいお上さんになるだらう。」と山の小人はとろんとした目をしたがらひました。この老人はあまりお酒がいけないのです。

その後へ四番目の娘が出て來ました。この娘は大きな金の堅琴を持ち出して、先づ第一の絲

を鳴らすと、みんなは左の足を上げました。化物はみんな左利きなものなのです。それから二番目の糸を鳴らすと、誰もかれも勝手に娘の思ふまゝに引き廻されました。

「これはけんのんな娘さんだ。」と小人の老人が申しました。でも二人の息子は、とうに飽きて、すだまの丘から飛び出してしまひました。

「次の娘さんは、にをなさる。」と老人がたづねました。

「わたしはノルウェーの人を愛する事を學びました。わたしはノルウェーまで行かなければ結婚はしない積りです。」といひました。

でもきやうだい達の一番年下の娘が、小人の老人の耳にさゝやきました。

「あの人のいふのは、たゞ昔のノルウェーの歌に、世界がしまひになつても、ノルウェーの巖は壊れないといふ文句を聞いてゐるので、なんでも死ぬのがこはいから、さういふ國へ行きたがつてゐるといふわけなんですよ。」

「はッはッは、それでわかつた。ところで一番おしまひの七人目の娘さんは何ですぬ。」と老人はいひました。

「六番目の方が七番目より先ですよ。」と王様がいひました。王様は物の數へ方を知つてゐるのです。でも六番目の娘は初め出るのをいやがつてゐました。

「わたしは皆様に眞實を申し上げるほかなんにも知りません。」とその娘はいひました。「誰もわたしなどをかまふ方はありません。」

さて、一番おしまひの七番目の娘が現れました。この子は何が出来るでせう。この娘はいくらでも好き自由に、たくさんのお伽話をする事が出来ました。

小人の老人はいひました。

「ここに五本指があります。一本に一つづゝお話をしてやつて下さい。」

するとその妖精の娘は、老人の手首をつかまへました。老人はおなかをゆすぶつて笑ひました。で、薬指の番まで来て、はじめから婚約をするつもりでゐたやうに金の指輪をはめてゐた指に娘の手がさはると、老人はかういひました。

「その指をしつかりおさへてゐて下さい。この手はあなたのものだ。わたしが自分のお嫁になたをしよう。」

すると娘は、まあ先に薬指と小指にお話をしてからにしようといひましたが、老人は、

「いや、そのお話は冬まで待ちませう。何れその時は一しよに樅の木の話も白樺の木の話も木の精の贈物や、霜の話も聞きませう。さういふことはあちらの國では知つてゐるものがないのだから、あなたもその話をする機會は十分あるといふものだ。そこで我々は石の部屋の中で、松脂の火をもして、昔のノルウェーの王様が使つた金の角の盃で蜜糖水を飲みながら話を聞かう。ちやうど水の精からもらつてある。で、さうして一しよにゐる所へ家すだまがきつとたづねて来る。あの男は山の娘の歌をたくさん歌つてくれる。さぞ面白いことだらう。鮭が瀧上りをする。岩の壁にぶつかると、でも我々の手にはいるまい。何しろなつかしいノルウェーの故郷には、實にたのしい面白い生活がある。ところで子供等はどこへ行きましたね。」

全く、どこへ行つたでせう。まあ、あの子供達は野を駆け廻つて、王様の命令通り焚松の行列を作つてやつて来た鬼火の火を、ふき消して廻つてゐたのです。

「どうもいたづらな子供どもだ。お前達に後のおかあさんをもらつてあげたのだ。どうかお前たちもお嫁さんをさがしてもらひたいものだ。」けれども子供達はおしゃべりをしたり、ふざけ

廻る方が好きなので、お嫁なんか大きらひだといひました。そこで彼等は演説をしたり、兄弟の杯を打ち合つたり、杯の藝當を見せるために杯を逆さに返して見せたりしました。それからこんどは上着をぬいで、構はず食卓の上にごろりと横にころがりましました。けれども小人のおぢいさんは若い花嫁さんと一しよに、部屋の中ちゆうをどり廻つて、靴の取り換へつことなどしました。これは指輪の交換などよりも、ずつと氣のきいたやり方であつたのです。

「さあ鶏が鳴きますよ。」と臺所の始末をしてゐた年寄の妖女がいひました。「そろ／＼戸を閉めなければならぬ。日がさし込むと顔の色が悪くなるから。」

そこですだまの丘はしまつてしまひました。

とかげ達は駆け廻つて、ちつろな木の中を上つたり下りたりしながら、

「わたしはあのノルウェーから来た小人のぢいさんが好きだよ。」と一人がいひました。

「おれはあのをかした子供達の方がいい。」と、みみずはいひました。でも氣の毒なこの蟲はちつとも目が見えないのでした。

赤い靴

六六二

ある時小さい女の子がゐました。大層きれいな可愛らしい子でしたけれども、貧乏だったので、夏のうちははだして歩かなければならず、冬は厚ぼつたい木の靴をはきました。ですからその女の子の可愛らしい足の甲は、すっかり赤くなつて、いかにもいぢらしく見えました。

村の中ほどに年よりの靴屋のおかみさんが住んでゐました。そのおかみさんは一生懸命に赤い布の古ぼけた小切れで、小さな靴を、一足こしらへました。この靴は大層格好のわるいものでしたが、十分心のこもつた品で、その女の子にやることになつてゐました。その女の子の名はカレンと言ひました。

カレンは、おつかさんのお葬式の日、その靴を買つて、初めてそれをはいて見ました。その靴はたしかにお葬式には相應はしくないものでしたが、ほかに靴といつてなかつたので、素足の上にそれをはいて、粗末な棺桶の後からついて行きました。

その時ふと年とつた立派な女の人を乗せた古風な大馬車が通りかゝりました。女の方は娘の

様子を見ると、氣の毒になつて、

「わたしが世話をいたしますから、この子を下さいませんか。」と、坊さんに申しました。

カレンはこのやうになつたのも、赤い靴のおかげだと思ひました。ところがその婦人は、これはひどい靴だと言つて、焼きすてさせてしまひました。その代りカレンはさつぱりした、見苦しくない着物を着せられ、本を讀んだり、物を縫つたりすることを教へられました。人々はカレンの事を可愛らしい女の子だと言ひましたが、カレンの鏡は、

「あなたは可愛らしいどころではありません。ほんたうにお美しくつていらつしやいます。」と申しました。

ある時、女王様が王女を連れてこの國を御旅行になりました。人々は城の方に群を作つて集りました。その中にはカレンもはいつてゐました。女王は美しい白い着物を着て、窓のところに現れて、人々に自分の姿が見えるやうになさいました。王女はお供をつれず、金の冠もかぶつてゐませんでしたが、目のさめるやうな赤いモロッコ皮の靴をはいてゐました。その靴はたしかに靴屋のお上さんが、カレンにこしらへてくれたものより、もつと、もつと、綺麗なものであ

りました。世界中搜したつて、この赤い靴にくらべられるものがありませうか。

さてカレンは堅信式をうけるまでの年頃になりました。新しい着物ができたため新しい靴もはくことになりました。町の金持の靴屋が自分の家の小さな部屋で、カレンのかはいらしい足の寸法をとりました。そこには、美しい靴だの、びか／＼光る長靴だのがはいつた大きなガラス張りの箱が並んでゐました。その部屋は大層綺麗でしたが、あの年とつた婦人は、よく見えなかつたので、少しもいいとは思ひませんでした。いろ／＼と靴が並んでゐる中に、まるで王女がはいてゐたのとそつくりの赤い靴がありました。なんといい美しい靴でしたらう。靴屋さんはこれは伯爵のお子さんのためにこしらへたのですが、足に合はなかつたのですといひました。「これはきつと、光澤革だね。まあ、よく光つてゐること。」と、老婦人はいひました。

「えゝ。ほんたうに、よく光つてをりますこと。」とカレンは答へました。その靴はカレンの足に合つたので、買ふことになりました。けれども老婦人はその靴が赤かつたとは知りませんでした。といふのはもし赤いといふことがわかつたなら、老婦人は決して、カレンがその靴をはいて、堅信式を受けに行くことを許さなかつたからです。でもカレンはその靴をはいて堅信式

をうけに行きました。みんなカレンの靴に目をつけました。そして、カレンがお寺の闕をまたいで、唱歌所の入口へ進んで行つた時、墓所の上の古い像も、かたいカラーをつけて、長い黒い着物を着た牧師や牧師の奥さん達の畫像も、じつと目をすゑて、カレンの赤い靴を見つめてゐるやうな氣がしました。それからカレンは坊さんがカレンの頭の上に手をのせて、神聖な洗禮のことや神さまと一つになること、これからは一人前の基督信者として身を保たなければならぬことなどを話してきかせても、自分の靴の事ばかり考へてゐました。やがて、オルガンがおごそかに鳴つて、子供達は若々しい、いい聲で歌を歌ひました。唱歌組を指揮する年のよつた人もまた歌ひました。けれどもカレンは、自分の赤い靴の事ばかり考へてゐました。

お晝すぎになつて、老婦人はカレンのはいてゐた靴が赤かつたことを、方々から聞きました。そこで、そんな事をするのはなまいきで、神儀にそむいた事だ。これからお寺へ行く時は古くつても、必ず黒い靴をはいて行かなくてはならないと申しわたしました。

その次の日曜は、堅信式後初めての聖餐祭が行はれる日でありました。カレンははじめ黒い靴を見て、それから赤い靴を見て、それからもう一度赤い靴を見直した上と／＼それをはい

てしまひました。うらゝかに目が輝いてゐました。カレンと老婦人とは麥畑の中の小道を歩いて行きました。その道はかなりほこりつぽい道でした。

お寺の戸口のところに、白いといふよりは全く赤い髭をはやして、撞木杖にすがつた、年寄の癡兵が立つてゐました。癡兵はほとんど、頭が地面につかないばかりにおじぎをして、老婦人に靴のほこりを拂はせて下さいと頼みました。そしてカレンもやはり亦、自分の可愛らしい足をさし出しました。

「やあ、これは美しい舞踏靴でございますね。お踊りになる時にびつたりと足につきますやうに。」と癡兵は言つて、カレンの靴の底を手でびた／＼叩きました。

老婦人は癡兵にお金を恵んで、カレンをつれてお寺の中へはいつてしまひました。

お寺の中では誰も彼も一齊に、カレンの赤い靴に目をつけました。そして畫像といふ畫像もみんなその赤い靴を見ました。カレンはお寺で膝まづいてゐる間は、たゞもう自分の赤い靴の事ばかり考へて、讚美歌を歌ふことも忘れてしまへば、お祈りを捧げることも忘れてしまひました。

やがて人々はお寺から出て來ました。そして老婦人は自分の馬車に乗りました。カレンもやはり馬車に乗らうとして足をもちやげました。すると癡兵はまた、

「いや、ずるぶんきれいな舞踏靴だな。」と言ひました。

すると、不思議なことに、いくらしまいとしてもカレンは二足三足舞踏の足をふみ出さずにはゐられませんでした。するとつゞいて足はひとりでに、どんどん踊り續けて行きました。カレンはまるで靴の思ふまゝになつてゐるやうでした。カレンはお寺の角の處を、ぐる／＼踊りまはりました。いくら我慢しても、さうしないわけにはいかなかつたのです。御者はおつかけて行つて、カレンをつかまへなければなりませんでした。そして御者はカレンを抱きかゝへて、馬車の中へいれましたが、足は相變らず踊り續けてゐたので、カレンはおとなしい老婦人を、いやといふほど蹴とばしました。やつこのことで、みんなはカレンの靴をぬがせました。すると、カレンの足はそのまゝじつと動かなくなりました。

内へ歸るとその靴は柵の上にせられてしまひました。けれどもカレンはその靴が見たくてたまりませんでした。

さて、老婦人は大そう重い病氣にかゝつて、噂によると、二度と癒ることはあるまいといふ事でした。誰かゞ老婦人のそばについて看護をしなければなりません。この事は誰よりもさきに、まづカレンがしなければならぬ務めでした。けれどもその日はその町で舞踏會が開かれることになつてゐて、カレンはそれに招待されてゐました。カレンは二度と助からない老婦人を見たり、赤い靴を眺めたりしました。そして赤い靴をはいたところで、ちつともわるいことはあるまいと考へました。で、カレンは赤い靴をはきました。それだけでは格別わるいこともないので。——ところがそれからカレンは舞踏會に行つて踊り始めました。これはよくないことでした。

ところで、カレンが右の方に行かうとすると、靴は左の方に踊り出し、段々を昇らうと思へば靴は下の方へ踊り出し、それから往來に出て、町の門から外へ踊り出てしまひました。カレンは踊らないわけには行きませんでした。そして暗い森の中へすん／＼踊りながらいつて行きました。

すると木の間に何か光つたものが見えたので、カレンはそれをお月様ではないかと思ひまし

た。けれどもそれは赤い髭をはやしたあの癡兵で、目で頷きながら、

「やあ、すゐぶんきれいな舞踏靴だな。」といひました。

そこでカレンは驚いて、赤い靴を脱ぎすて、しまけうと思ひました。けれども靴はしつかりとカレンの足にひつついてゐました。カレンは靴下を引きちぎりました。しかし、それでも靴はびつたりと、足にくつついて居ました。そしてカレンは踊りました。野原だらうが、牧場だらうが、雨が降らうが、日が照らうが、夜といはず、晝といはず、いやでも應でも、踊り續けないわけにはいきませんでした。けれども、夜などは、すゐぶん、こはい思ひがしました。

カレンはあけひろげた墓地の中に、踊りながらいつて行きました。そこでは死んだ人は踊りませんでした。何かもつと面白いことを死んだ人達は知つてゐたのです。カレンは、よもぎぎくが生えてゐる貧乏人のお墓に腰をかけようと思ひました。けれどカレンは、おちつくことも出来なければ、休むことも出来ませんでした。そしてカレンは戸の開いた教會の入口の方に踊りながら行つた時、一人の天使がそこに立つてゐるのをみとめました。その天使は白い長い着物を着、肩から足まで届く羽をはやしてゐて、顔付きはまじめくさつて、いかめしく、手には

幅の廣い、びか／＼光つた劍を持つてゐました。

「お前は踊らなくてはならん。その赤い靴をはいて貴様が色が青くなつて冷たくなるまで、お前の體がしなびきつて骸骨となつてしまふまで踊つてをれ。お前は高慢ないばつた子供等が住んでゐる家を一軒、一軒と踊り廻らねばならん。子供等がお前の居ることを知つておつかなるやうに、お前はその家の戸を叩いて見るんだ。お前は踊らなくてはならん。踊つてゐるんだぞ。」と、天使は言ひました。

「かんにんしてください。」と、カレンは叫びました。

けれども、靴がどん／＼門のところから、切株や石ころの上を通つて、野原の方へ動き出してしまつたものですから、カレンは天使が何と返事をしたか、聞くことが出来ませんでした。そしてカレンは、しよつちゆう、踊つてゐなければなりませんでした。

ある朝、カレンはよく見覺えてゐる、家の門ぐちを踊りながら通りすぎました。すると家のなかで讚美歌を歌ふのが聞えて、花で飾りつけられた一つの柩が運び出されました。そこでカレンは自分を可愛がつてくれた老婦人が死んでしまつたことを知りました。そして自分がみんな

から棄てられて、天使からは死刑の宣告を言ひ渡されたことを感じました。

カレンは踊りました。いやでも應でも、まつくらな闇の夜も踊つてゐなければなりませんでした。靴はカレンを荊の上でもかまはずに連れて行きましたので、カレンは體をひつかいて、とう／＼血を出してしまひました。カレンは荒野を横ぎつて、ぼつねんと立つてゐる小さな家の方へ踊つて行きました。この家には死刑執行人が住んでゐることを、カレンは知つてゐました。そして、ガラス板のところを指で軽く叩いて、

「出て来て下さい。出て来て下さい。踊つてゐなければならぬので、わたしは中へはいることは出来ないので。」と申しました。

「あなたは、たぶんわたしが何であるか、御存じないのでせう。わたしは斧で悪い人達の頭を切る役目です。わたしの斧はあんなに鳴つてゐるぢやありませんか。」と死刑執行人は申しました。

「わたし首を切つてしまつてはいやですよ。さうするとわたしは罪を悔い改めることが出来なくなりますからね。けれどもこの赤い靴と一しよにわたしの足を切り取つてしまつて下さいな。」とカレンはいひました。

それからカレンは、すっかり自分の罪を懺悔しました。そして、死刑執行人は赤い靴をつけたカレンの足を切つてしまひました。でも靴は小さな足といつしよに、野原を越えて奥深い森の中へ踊つて行つてしまひました。

それから死刑執行人は、撞木杖といつしよに一對の義足をカレンのためにこしらへてやり、罪人がいつも歌ふ讚美歌をカレンに教へました。そして、カレンは斧をつかんだ手にキッスして荒野を横ぎつて、そこを出て行きました。

「さあ、わたしは十分、赤い靴のおかげで、苦しみを受けてしまつた。これからみんなが見てくれるやうにお寺へ行つて見ませう。」とカレンはいひました。

そしてお寺の入口の方へ急いで行きましたが、そこに行きついた時に、赤い靴が目の前に踊つてゐましたので、カレンはびつくりして引つ返してしまひました。

まる一週間といふもの、カレンは悲しくて悲しくて、いちらしい涙を流して、何度も何度も泣きました。けれども日曜日になつた時に、カレンは、

「こんどこそわたしは心を勵まして、自分の罪の惱みを十分に受けました。もうわたしもお寺

に坐つて、少しも恥ぢるところのない人達と同じやうに正しい人になつたと思ふわ。」といひました。

それからカレンは勇氣を出して進みました。けれども墓地の門にもまだはいらないうちに、カレンは自分の前を踊つて行く赤い靴を見たので、すっかりこはくなつて、また引つ返して來ました。そして自分のわるかつたことを心から後悔しました。

そこでカレンは牧師さんの家に行つて、どうぞ女中に使つて下さいと頼みました。そして、なまけずに一生懸命に、出来るだけよく働くことを約束しました。カレンはお給金などはいくらでもいいのでした。たゞ、心がけの正しい人々と一つ屋根の下で暮したかつたのです。牧師さんの奥さんは、カレンを可哀さうに思つて使ふことにしました。そしてカレンは大そうよく働いて、輕はずみな考は起しませんでした。夕方になつて牧師さんが高い聲で聖書を読むと、カレンは靜かに坐つて、じつと耳を傾けて聞いてゐました。子供達はみんな大そうカレンが好きでした。けれども子供たちが着物の事や、はでやかなことや、美しいことなどを噂すると、カレンはいつも首を横に振りました。

次の日曜に人々は打連れてお寺に行きました。そして、カレンもやはり行つたらどうだと思われました。けれどもカレンは撞木杖にすがりながら、目に涙をためて、悲しいやうな様子でした。そこで人々は神さまのお聲を聞くために出かけましたが、カレンはひとりかなしく自分の狭い部屋にはいつて行きました。その部屋はカレンの寢臺と一脚の椅子とが、やつとはいるぐらゐの廣さしかありませんでした。そこでカレンは讚美歌の本を持つて坐りました。そして信心深い心もちで、それを讀んでゐますと、風のたよりに教會でひくオルガンのしらべが聞えて來ました。カレンは涙で濡れた顔をあげて、

「あゝ神さま、わたくしをお救ひ下さいまし。」と申しました。

すると日はまことにうらゝかに輝きわたつて、カレンが前にお寺の戸口のところで、晩に見た天使と同じ天使が、白い着物を着て、カレンの目の前に立ちました。けれどもこんどは鋭い劍などは持つてゐず、その代りに、薔薇の花の一杯ついた緑の枝を持つてゐました。天使がそれで天井をさしますと、天井は高く高く昂つて行つて、天使が枝を觸れたところからは残らず、金色の星が輝き初めました。天使はこんどはぐるりの壁にさはりました。すると壁は廣く、廣

くひろがつて行つて、カレンは豊かな音を出して鳴つてゐるオルガンを見れば、牧師さんたちやそのおかみさんたちの古い肖像畫を見ました。一同は飾りたてた椅子について、讚美歌の本を見て歌つてをりました。お寺が、狭い部屋の中に立つてゐるかはいさうな少女の子のところへ動いてやつて來たのでした。もう一つほかの言葉を言へば、カレンの部屋がそのまゝお寺になつてしまつたのでした。カレンは牧師さんの家の人々と一緒の席についてゐました。そして人々は讚美歌を歌つてしまつて顔をあげた時、頷いて、

「よくまあ、お前はここへ來ましたね。」といひました。

「これも神様のお恵みです。」とカレンはいひました。

そしてオルガンは、鳴りわたり、子供たちの合唱する聲はやさしく、かはいらしく響きました。うらゝかな日の光が、窓から暖かく流れこんで、カレンの坐つてゐるお寺の椅子を照しました。カレンの心臓は日の光と、平和と歡喜とで、いつばいになりすぎたため破裂してしまひました。けれどもカレンの魂は日の光につて天の方へ飛んで行きました。そして、神さまの玉座の前にあの赤い靴のことを尋ねるものは一人もありませんでした。

跳びっこ

蚤と蟋蟀と紙切蟲が或時集つて、誰が一ばん高く跳べるかためて見たいと思ひました。そこで方々の人を招待して、その外誰でも催しを見たいといふ八に來てもらふことにしました。世間の人の許す折紙付の三大跳手は、もう一間の中に集つてゐました。

「一ばん高く跳んだものにはわたしの娘をやらう。」と王さまは叫びました。「せつかくとんでもごほうびが無くてはつまらまい。」

まつ先に出たのは蚤でした。中々りつばな態度で見物席の四方に向つて禮をしました。何しろ貴族の血をうけてゐますし、その上人間の社會にばかりつき合ひがありました。そこは大きな違ひでした。

次に蟋蟀が出ました。蚤に比べるとずつと重苦しい體でしたが、上手なからだのこなしで、生れるからにゆづられて來た草色の制服を着てゐました。その上自分は大へん古いエジプト人の家から出たもので、内にゐれば大したものだといふことでした。事實はかうでした、この蟋

蟀は野原から出て來て、或紙の箱に入れられたのです、その紙の箱は三階づくりで、壁はこのカラ色彩色をした繪ガルトアとして、戸や窓はハートの女王の札で出來てゐました。でいふには、「わたしの歌はまつたくうまいものですよ、それは子供の時から歌をうたひつゞけてゐるので、今だにカルタの家に住めずにゐます。この間生れた蟋蟀が十六匹まで、わたしの聲をきいただけでやきもき氣をもんだために以前よりも瘦せ細つた位ですよ。」

蚤と蟋蟀が自分達の身の上について話したことはこんなものでした。で、これだけで十分王女をお嫁にもらへると思つてゐました。

紙切蟲はなんにも言ひませんでした、けれどみんなの意見として、それはよけい物を考へてゐるしるしだといふことでした。そして飼犬が鼻を立て、匂ひをかいだところでは、紙切蟲はなんでもいいところに生れたものにちがひないといふことでした。頑固に沈黙を守る功で三つまで勳章をもらつてゐる老顧問官は、紙切蟲に豫言の靈能のあることを斷じて主張しました。といふわけは、この冬がきついかゆるいかといふことはこの蟲の背中を見れば分かるといふことでした。しかもこれは唇を作る人の背中を見たのでは分からないことでした。

「なるほど、わたしは何も言はんよ。しかしやはりわたしはわたしで意見がある。」と王さまは叫びました。

さて試験ははじまりました。蚤はあんまり高くとんだので、誰もその行くへがわかりませんでした。そこでみんなこれはきつとばなかつたに違ひない。不名譽千萬な話だといひました。蟋蟀はちやうど蚤の半分だけとびました。しかし王さまのお顔にとびついたので、失禮千萬な奴だと王さまはおつしやいました。

紙切蟲はしばらくの間じつと考へ込んでおりました。結局これはとばすにしまふのだなとみんなは思ひ込んでしまひました。

「どうかあの蟲は病氣がわるくなければいいが。」と飼犬はいひました。びよん。紙切蟲は横とびに一生存けんめい、すぐそばの金の椅子にかけてゐた王女の前掛の中にとび込みました。それを見て王さまはおつしやいました。「わたしの娘のより上の者は何にもないのだから、その上にとび上がったのは、まづこの上なく高くとんだわけだ。しかしさういふことは自ら分別があつての上でなくてはできない。紙切蟲は分別のあるところを見せた。これは勇氣もあれば、智慧

もあるぞ。」

これで紙切蟲は王女をもらつてしまひました。

蚤はいひました。「まあどうでもいいさ。だから王女は紙切蟲のぢいさんのお嫁になるだけのことだ。一ばん高くとんだのはわたしだ。だがこの世界ではめつたに天分と報酬はともなはない。」何でも見てくれのいいものの注意をひくのがこの節の世の中さ。」

そこで蚤は外國の戦争に出て討死をしたといふことです。

蟋蟀はおもての青い土手に坐つて、つくぐぐと世の中のことを思案してゐました。そしてこの蟲もこんなことをいつてゐました。

「さうだ、何でも見てくれのいいのが一ばんさ——見てくれのいいのに限るのさ。」かういつてこの蟲は特有な物がなしい歌をうたひはじめました、その歌からこのお話を聞き出したのです。なるほどこれはすつかり嘘だかもしれませんが、しかしかうして白い紙に黒い字で印刷されてのことつてゐるのです。

女羊飼と煙突掃除

三八〇

年代のために眞黒に煤けて、渦巻や唐草模様なぞのついた、至つて古風な箆笄をあなたはごらんになつたことがありますか。ちやうど、さういつたやうな箆笄が、客間に置いてありました。それはひいおばあさんの時代のおかたみで、上から下まで、薔薇や、チューリップの花が一面に彫りつけてありました。そしてその上に、それこそ唐草模様を彫つた間から、いくつとなく、角を出した小さな牡鹿の首が、によき／＼出ておりました。ところでその戸棚のまんなかにもつて行つて、全身の男の姿が彫つてありましたが、それは見るからをかしな格好をしてゐて、一體笑つてゐるのでせうが、しかめつ面をしてゐるといふ方がほんたうで、とても笑つてゐる顔ではありませんでした。その上山羊足をして額にはちよびりと角をはやし、長い顎ひげを生やしてをりました。いつもこの部屋で遊ぶ子供たちは、この男のことを、山羊足の大將少將軍司令官と呼んでをりました。この名前はこの男の形に相應しておりました。こんな彫りにくさうな像はないし、こんな呼びにくい名前もありません。何しろこんな妙な稱號を捧げられるものは世の中

にたんとおるものではありません。ともかく技術なり努力なりを費してかういふものができ上がつてゐたのです。さてこの男は、年が年中、鏡卓の上ばかりじつとにらみつけておりました。といふのは、その卓の上に瀬戸物のかはいらしい羊飼の女が立つてゐたからでした。その女の靴は金めつきがしてあり、着物には薔薇の花が綺麗にぬひつけてありました。その上に金の帽子と、羊飼の杖を持つておりました。これはほんたうに愛らしい様子の女でした。すぐそのそばに、これもまた瀬戸物でこしらへた、石炭のやうに色の黒い小さな煙突掃除が立つておりました。この掃除人足は、ほかのもの同様に見きれいにしておりました。これはつい焼物師の氣まぐれで煙突掃除の形に作られたといふまでで、同じ手間で王子をこしらへようと思へば出来たかも知れません、もと／＼材料は一つものでした。

さてこの掃除人は梯子を持つて、乳色の上にはほんのり紅い女の子のやうな顔をして、大それたしやれこんで立つておりました。これはたしかに細工の失敗で、掃除人はもう少し色が黒い筈でありました。掃除人は女羊飼とびつたりくつついて立つておりました。二人とも初めからさういふ工合に置かれたのですが、二人はさう置かれると一しよに早速結婚の約束をしておりました。

また約束をしても悪くないといふわけは、二人は似合つた同士でした。二人とも年は若いし、おなじ瀬戸物で作られ、同じやうにこれはやすい品物でした。

二人のすぐそばに、もう一つ、三倍も大きい人形が立つてゐました。これは年とつた支那人の人形で、首をがく／＼することができました。この支那人もやはり瀬戸物で、自分ではあのかはいらしい女羊飼のおぢいさんだといつてゐましたが、その證據はべつになかつたのでした。また、この年寄の支那人の人形は、女羊飼は自分に頭があらぬのだといつてゐて、女羊飼をお嫁に貰ひたがつてゐた山羊足の大將少將軍司令官に向つて、おれが承知だよといふやうながてん／＼をしてゐました。

「さあ、お前の夫に持たして上げようといふ人は、外でもない、たしかにマホガニー製とわたしの信じてゐる人だ。お前は山羊足の大將少將軍司令官夫人になるのだよ。何しろあの人の所には銀の皿小鉢が、ぎつしり棚につまつてゐる上に、祕密のひきだしには、しこたまお金をも溜めてもつてゐるのだよ。」とかう年寄の支那人はいひました。

「わたしあんな暗い簞笥の中なんかにはいるのいやだわ。それにあの人は、もう十一人も瀬戸

物の奥さまをしまひ込んで持つてゐるつて噂ですもの。」と、女羊飼がいひました。

「ちやあ、お前は第十二人目の奥さんになるといふわけだ。今夜、あの古い簞笥が、キーキー鳴つたら、ぜひすぐとお前は結婚しなければならぬよ。」と、かう支那人はいつてがてん／＼をやりながら、ぐつすりねこんでしまひました。

けれども女羊飼は泣いてゐました。そして、自分の大すきな、瀬戸物の煙突掃除の方を見て、「お願いですから、わたしを連れて逃げて下さいな。わたしたちはここにじつとしてはゐられなくなりましたから。」といひました。

「お前の望みなら、どんなことでもしよう。ちやあさつそく、逃げ出すことにする。煙突掃除をしたつて、お前一人ぐらゐ養つて行くことは出来ようから。」と煙突掃除が答へました。

「どうかしてこの卓から、無事に下へ下りられないかしら、わたしはここを出てしまはないうちは、心配でたまりませぬわ。」と女羊飼がいひました。

そこで煙突掃除は女羊飼を慰めて、卓のふちの刻み目に足をかけて、それから卓の脚にくるくるまきついてゐるめつきの唐草模様を足が／＼に下りる工夫をした上に、自分の梯子まで加

勢に持つて來ましたから、どうやら二人と、牀の上に下りてしまひました。でも二人が古い衣類箆筒を見上げた時、そこでは大變な騒ぎになつてゐました。そこに彫りつけられた牡鹿はみんな首をのびし、角を振立て、頭をくるく／＼動かしました。また、山羊の脚大將少將軍司令官は、いきなり飛びあがつて、年寄の支那人に向つて、

「おい、二人が逃げて行くぞ。逃げて行くぞ。」とどなりました。

これで二人はちよつとおどかされたものですから、すばやく鏡臺のひきだしの中へ飛び込みました。

そこにはよくそろつてゐないランプが三組四組集つてゐて、念入りに作られた人形芝居もありました。ちやうど芝居が始まつてゐて、ダイヤや、ハートや、スベードなどの女王達が、チューリップの花で體を煽ぎながら、うち揃つて一番前の列に腰かけてゐました。そしてそのうしろには兵士たちがのこらず立つてゐて、ランプのおきまりで、上にも下にも頭があるぞといふことを見せてゐました。その芝居はお互に愛しあひながら結婚することの出來ない二人の仲のことを取り扱つたものでした。そこで女羊飼はそれがまるで自分の事のやうだといつて、泣き

ました。

「わたしここにはゐたくまれませんわ。出てしまひませうよ。」と、女羊飼がいひました。

けれど二人がまた牀の上へ出て來て、卓の上を見上げますと、あの年寄の支那人は目をさまして、體ぢゆうぶる／＼ふるはせてゐました。この支那人の下半身はたゞの土の塊だつたのです。

「あら、支那人がおつかけて來てよ。」と女羊飼は叫びました。そして、驚いた拍子に瀬戸物の膝をつきました。

「いい事がある。一緒にあの隅にある大きな瓶の中に、はひ込んでしまはう。さうすれば、薔薇や、ラワンデルの花の上にねころぶことも出來るし、支那人がやつて來たら、目の中に鹽をぶちこんでやることも出來るよ。」と、煙突掃除がいひました。

「そんな事をしたつて、未始終は駄目ですわ。それに支那人が、あの瓶といつか結婚の約束をしたことはわたし知つてゐますもの。古い戀は腐らないといふこともありますよ。だから何でもここの家から廣い世界へ出て行くよりほかに道はありませんわ。」と、女羊飼が答へました。

「君は僕と一緒に広い世界へ出て行く勇氣がほんたうにあるのかい。世界といふものが、どんなに広いものであるか、また我々は二度とここへは歸つて來られまいといふ事などを考へて見たのかい。」と、煙突掃除が尋ねました。

「それは考へましたとも。」と女羊飼が答へました。

そこで煙突掃除はじつと女羊飼の顔を見ながら、

「わたしの出て行く道は煙突なのだ。お前は一緒に煖爐をくゞつて、煙突をぬける勇氣がほんたうにあるかい。それならわたし達は煙突の中にはいつて見る。さうすればあとはわたしが心得てゐるよ。わたし達はそれこそ奴らがとても追つて來られないほど高い所に昇つて行くのさ。すると一ぱんてつべんに、広い世界へ出る穴があるんだよ。」といひました。

かういつて、煖爐の入口に、女羊飼をつれて行きました。

「やれまあ、ずいぶんまつくらだこと。」と羊飼の女はいひましたが、でも煙突掃除と一緒に、火をもす坑を通つたり、煙をとほす管をぬけたり、まつくらな間の中を通つて行きました。

「さあ、いよく煙突の中へ來たんだよ。ほら、ごらんよ、上の遠くの方で、綺麗な星が光つ

てゐるぢやないか。」と煙突掃除はいひました。

それは、さあ、わたしが案内して上げるからおいでと言はないばかりに、二人の眞上に光つてゐた、ほんものゝ星でありました。そこで二人は大そう険しい道を、高く、高く、蟲のやうに這ひ上つて行きました。でも煙突掃除は女羊飼の體を支へてやつたり、おしあげてやつたり、女の小さな瀬戸物の足をふみかけるのに一番いい足掛りを教へてやつたりしました。こんなぐあひで、やうく二人は煙突のふちに着きました。そしてもうへとくになつたのも無理はありません、疲れきつてゐたものですから。そこでそのふちのところにもづ腰をかけました。

星をいつぱい饑めた空は、上の方に高く擴がつて、町の屋根といふ屋根は、すつと下の方に沈んでゐました。二人はひろびろと大きな世界を見渡しました。可哀さうに女羊飼は世界がまさかこんな大きなものであるとは決して考へた事はありませんでした。そしてかはいらしい頭を煙突掃除にもたせかけながら、ひどくしゃくり上げて泣いたものですから、帯の金は剝げ落ちてしまひました。

「これでは、これでは、あんまりですわ。わたしにはとてもゐたたまれませぬわ。世界はあん

まり大きいのですもの。もう一度、あの鏡の下の卓に戻る事が出来ればいいと思ふわ。そこへ戻るまでは、わたしは決して楽しくはなかつてよ。今わたしはあなたについて広い世界に出て来ました。だからもしあなたがほんたうにわたしをかはいいと思ひなら、もう一度わたしを連れ歸ることが出来る筈だわ。」と羊飼の女は申しました。

そこで煙突掃除は、よくわかるやうに、年寄の支那人の事や、山羊の脚大將少將軍司令官の事などを言つて聞かせました。けれども女羊飼は激しくすゝり泣きをしなから、好きな好きな煙突掃除にまごころをこめたキッスをしました。それがあんまりいぢらしいので、馬鹿なことだとは思ひながらも、煙突掃除は女羊飼の言ふことに従はないわけには行きませんでした。

そこで二人は大骨を折りながら、またく煙突を下がつて行きました。そして二人は煙のぬける管や火をたく坑をくゞり抜けましたが、一向楽しい心もちはありませんでした。やがてやつとのことで眞暗な燧燼の中に出て来ました。そこで部屋の中でどんな事が起つてゐるかを知るために、まづ爐の戸のかげで、耳をすましました。ところが部屋の中はしんとしづまり返つてゐましたから、二人が覗きこむと、——牀のまん中に、年寄の支那人がひつくり返つてゐまし

た。支那人は二人を追つかける拍子に、卓の上から落ちて、三つのかげらにわれたのでした。

その背中はずつくり一つのかげらになつてとれて、頭は隅の方にころがつてゐました。山羊の脚大將少將軍司令官は、相變らずいつもの所に突つ立つたまゝ考へ込んでゐました。

「まあ、恐い事だこと。おぢいさんはこはれてしまつたのね。これもわたしたちのせゐですわ。おぢいさんひとりを殺しやしません。わたしも死んでしまふ。」と女羊飼は言つて、自分の腕をねぢりました。

「おぢいさんはなほせばなほるのだよ。うん、うん、すつかり元の通りになほるのだ。さう早まるには及ばない。おぢいさんの背中をついで、首のところを釘をうてば、またすつくり新しくなるのさ。そして相變らずわたし達にいやな事を言ふだらう。」と煙突掃除はいひました。

「まあ、さうでせうか。」と女羊飼はふしぎさうにいひました。

そこで二人はまた卓の上によぢ上つて、もとの場所におちつきました。

「さてとうく歸つて来た。無駄骨を折つたものさ。」と、煙突掃除はあさけるやうにいひました。

「差當りまあおちいさんに釘を打つてやりたいものね。ずいぶんお金のかゝることなんでせうか。」と女羊飼はいひました。

六九〇

さて支那人はほんたうに目釘を打たれました。持主は支那人の背中をセメントでつぎ、首のところには上等の釘を打ちこみました。これで新しいのと同様になりましたが、たゞがつてんがつてんをすることは、出来なくなりました。

「どうも君は仲々高慢になつたやうだね。何もそんな風をしなくつたつてよからうと僕は思ふよ。一體、女羊飼を僕にくれるのか、くれないのか。」と、山羊の脚大將少將軍司令官はかう支那人にいひました。

そこで煙突掃除と女羊飼とは、年寄の支那人の方を憐れみを求めるやうに眺めました。といふのは、もし支那人が首を縦に振るといけないと思つたからでした。ところが支那人は縦にも横にもてんで首をふる事が出来ませんでした。そして自分が首のところに釘を打ちこまれてしまつたのだといふことを、何も知らぬ人に話すのは、支那人にとつてはめんどうくさい事でした。そこで煙突掃除と女羊飼とは、やつぱり一緒に暮すことが出来ました。二人はこのおち

いさんの首に打ちこまれた釘を、ありがたいと思ひました。そしてお互に粉々にこはれてしまふまで、むつまじくくらししました。

デンマルクぢいさん

デンマルクにクロンブルクといふお城があります。お城のある所はヨーレの入江にくつついた所で、毎日何百といふ船が通ります——イギリスの船、ロシアの船、ことによるとプロシヤの船もあるでせう。さういふ船はお城に向つて大砲の音で挨拶をして行きます。——ドーン。するとお城からもやはりドーンで答へます。これが大砲同士「今日は。」「いやあ。」といふ挨拶なのです。冬になるともう一艘も船は通らなくなります、それは海の上一めん、向ふ岸のスウェーデンの岸まで氷が張りつめて、まるで一つの往來のやうにしまふからです。デンマルクの国旗とスウェーデンの国旗がひるがへつてゐます、デンマルクの人とスウェーデンの人はもう大砲ではなく、その代りになつかしさうに手をにぎり合つて、「今日は。」「いやあ。」を交換するのです。そして白ペンとビスケットをもらつて行きます、なんでも外國の食物は一番うまいといふのです。しかし何といつても一ばん美しいのはクロンブルクの古城です。その奥まつてまつくらな、誰も行くもののない地下室にデンマルクぢいさんのホルデルは坐つてゐます。鐵

や鋼の鎧を着て、強い腕に頭をのせてゐるのです。その長い鬚は大理石の卓の上に垂れ下がつてゐます。眠つて夢を見てゐるのですが、デンマルクの國におこる出来事を一切夢で見えてゐるので、毎年クリスマス前の晩になると、天使が来て、おぢいさんに、夢で見えてゐることに間違ひはないといひきかれます、そしてデンマルクの國にはまだなんにも心配することはおこらないから安心して眠つてゐるがよいと告げ知らせます。しかし一旦そんな心配な事がおこつたとなると、デンマルクのおぢいさんはむんづと起き上がります、長い鬚を引くはすみに卓をひつくり返すほどの勢ひです。そこでおぢいさんは出かけて来て、世界ぢゆうの國々にきこえるほどの雄たけびをあげて敵に打つてかゝるのです。

或所で、おぢいさんは腰をかけたがらちひさい孫に向つてデンマルクぢいさんの話をこゝだけしました。こどもはおぢいさんのおつしやることは何でもほんたうのことだと思つてゐました。で、おぢいさんは坐つてこの話をしながら、ホルデルぢいさんの木像を彫つて、船の船首にいはひつけました。このおぢいさんは彫刻師で、船の船首にくつつける像を刻みますと、船の名はこの像にちなんでつけられるのです。で、そのときおぢいさんは、デンマルクぢいさん

の像を刻みました、それは得意らしく長鬚をしごいて、片手に巾のひろい軍刀をにぎり、片手をデンマルクの紋章のついた楯にかけて立つてゐるところでした。

六九四

さておちいさんはむかしのえらい男や女の人達の話をするぶん澤山して聞かせたものですか、とう／＼おしまひに子供は、デンマルクちいさんのやうな物しりになつてしまつて、あとは夢でも見るよりほかはなくなつてしまひました。で、子供は寢床の中にはいつてゐると、つい自分がじつさいに夜着に顎をつけてゐて、その顎の下に長い鬚がすん／＼生えて来るやうに思ふほどになつたのです。

けれどもおちいさんはせつせとしごと場に向つてゐて、とう／＼その夢の片はしを木に刻み出しました。それはデンマルクの紋楯でした。で、それができ上がったとき、おちいさんは改めて木像全体を見直して、これまで本でよんだり話で聞いたりしてゐたことを何くれと心にかへました。そしてその晩子供にその話をしてうなづきながら、目がねをふいてまたかけて、かうひとり言をいひました――

「さうだとも、わたしのゐる間にデンマルクちいさんの出てくることはあるまいよ。だがあそ

この寢臺の上にある子供は、ことによると見るやうになるかもしれない。もし一大事のおこつた場合にはしつかりやつてくれ。」

かういつておちいさんはまたうなづきました。で、デンマルクちいさんの像をよく見れば見るほど、つく／＼自分の刻んだ像のいいものだといふことがはつきり分かりました。ほんたうにそれは彩色がしてあるやうに見え、鎧の鐵と鋼の色には底光がしました。デンマルクの紋章の中の心臟形はいよ／＼赤く赤くなつて、金の冠をかぶつた獅子は今にもとびかゝりさうな勢ひでした。

「こりやあ世界一のりつばな楯だわい。」とちいさんはいひました。「獅子は強い力のしるし、心臟は柔和と愛情のしるしだ。」

そこでおちいさんはまづ一ばん上の獅子を見て、大イギリスをデンマルクの王旗の下に従へたカヌート王のことを思ひました。それから二ばんめの獅子を見て、デンマルクを一統してウエンド人の國を切りしたがへたワルデマールのことを思ひました。三ばんめの獅子をながめると、デンマルク、スウェーデン、ノルウェーを一統したマルガレットのことを思ひ出しました。けれ

ど赤い心臓をながめてゐるうちに、それは前よりも一層きら／＼しく光りました。それは炎のもえるやうでした。で、おぢいさんの心臓もそれにつれてもえ立つやうに思ひました。

第一の心臓はおぢいさんをまつくらな、狭くらしい牢屋の中へ連れて行きました。そこに一人ゐた美しい女の囚人は、クリスチャン第四世王の娘エレアノール・ウルフルトでした。薔薇の花のやうな形をした炎は、この人の胸にくつついて花を咲かせました。そこで花はデンマルク第一の高貴な立派な婦人といはれるこの人の心臓と一しよになりました。

さておぢいさんの靈魂は二ばんめの炎について、海の上へつれて行かれました。そこでは大砲がとどろいて、船は煙につままれてゐました。で、炎は名譽のリボンの形にかはつて、フウルトフルトが艦隊を助けるために、自分と自分ののつた船を空中に吹きとばさせた所へ行つて、その胸にびつたりくつつきました。

それから三ばんめの炎はおぢいさんをつれて、グリーンランドのあれ小屋へ行きました。そこではハンス・エゲトデが一言一行に愛をふくんで働いてゐました。炎はその人の胸に星となつてつきました、それもデンマルクの紋章の中の一つの心臓です。

それからおぢいさんの靈は浮ぶ炎の前にうつつてとんで行きました、炎がどちらに向つて行きたいと思つてゐるか靈はよく知つてゐるのです。百姓の女の賤しい小屋の中に、フリートリヒと六世が梁の上に白墨で名を書きながら立つてゐました。炎は王の胸の上でふるへました、その心臓の中でもふるへました。百姓家のいやしい部屋の中で、王の心臓はデンマルクの紋章の心臓になつたのです。そこでおぢいさんは目をぬぐひました、それはおぢいさんはフリートリヒと王を銀色の巻髪とあの正直さうな青い目でおぼえてゐました、そしてこの王のために生きてゐたのです。おぢいさんは両手を組んで、黙つたまゝじつと前を見つめました。その時おぢいさんの息子のお嫁さんがやつて来て、もうおそいからお休みにならなくてはなりません、お夕飯のしたくもできましたからといひました。

「でもおぢいさま、りつばにおできになりましたのね。デンマルクぢいさんも紋章の楯ものこちらね。わたくし何だかその顔に前からおなじみがあるやうに思はれます。」とお嫁さんはいひました。

「いゝや、そんなはずはないよ。」とおぢいさんは答へました。「けれどわたしはそれを見た、で

記憶にのこつてゐるとほりを木に刻みつけたのだよ。あれはデンマルクの暦の四月二日イギリス人が波止場の前に並んだ時だつた、わたし達が昔ながらのデンマルク人だといふことを見せたのはな。わたしがステーン・ビルレ艦隊のデンマルク號にのり組んでゐた時、そばに一人の男がゐた——それは弾丸の方からはがつてよけて行くやうな男であつた。おもしろさうにこの男は古い歌をうたつて、何か人間以上のもののやうに、砲をうつたり戦をいどんだりしてゐた。その男の顔をわたしは今でもよくおぼえてゐる。だがどこからその男は來て、どこへかへつて行つたものか、わたしは知らない——誰だつて知らない。どうもあれがむかしのデンマルクぢいさんその人で、クロンブルクから泳いでやつて來て、われ／＼の危急を救つてくれたのではないかとよく思ふのだ。それがわたしの考さ、その肖像はそれだ。」

さて木像はその大きな影を壁から天井の隅にまで投げてゐました。それはじつさいのデンマルクぢいさんが、そのうしろに立つてゐるやうに思はれたといふわけは、その影が動いたのです。でもそれは蠟燭の炎がじつとしてゐないためであつたのかもしれない。そこでお嫁さんはおぢいさんにキッスして、卓のわきの大きな眩かけ椅子に腰をかせせました。そしてお嫁

さんと、おぢいさんの息子でお嫁さんの夫で、寢臺にゐる子供のおとうさんになる人とは、坐つて一しよに夕飯をたべました。おぢいさんはデンマルクの獅子や、力と柔和をあらはすデンマルクの心臓の話をしました。そして十分わかるやうに、劍にそなはつた力よりほかの一つの力があるわけを話してきかせて、棚に指さしました、そこには古い本がのつてゐて、その中にホルベルクの喜劇の本がありました、それは大へんにおもしろいので、随分よくよまれたものでした。この中にむかしの人たちのおもかげを見つけることができます。

「ごらん、この人もやはり切ることを知つてゐた。」とおぢいさんはいひました。「それはこの人の力の及ぶ限り、世間の人間のおろかなことや間ちがつた考を切りとつたのだ。」——かういつておぢいさんは鏡に向つてうなづきました。その上には圓塔(7)のついた唇がのつてゐました。

「チホー・デンプラーへはまた肉と骨を切りはなすためでない、天界一切の星の中に一層はつきりした道を切り開くために劍をふるつた人だ。それからこの人の父親はわたしと同じ商賣で、つまりこの人は木像彫刻師の老人の息子だつたのだが、この人は銀のやうな髪の毛に巾のひろい肩で、その名は世界中にひろまつてゐる。さうさ、この人は彫刻家、わたしはたゞの木彫師さ。」

さうだ、デンマルクぢいさんはいろ／＼の形になつて出てくるかもしれない、従つて、世界いたる所の國々でデンマルクの武勇の話はきかれる。さあベルテルの健康を祝つてのまうよ。」けれども寢床の中の子供ははつきりとクロンブルクの古いお城とヨーレの入江、それからその奥ふかくほんたうのデンマルクぢいさんが、大理石の卓をつきとほしてのびてゐる長い鬚を生やして、この世界におこつてゐる一切の事を夢に見ながら坐つてゐる所がはつきり見えしました。デンマルクぢいさんもやはり木彫師が坐つてゐる貧しい小家を夢に見ました。世の中におこつてゐる一切の事を聞きました。そして眠りながらいふのです——

「さうだ、デンマルクの國民たち、わたしをおぼえておいで。おぼえておいで。いざといふ時にはわたしは行くぞ。」

さてクロンブルクのお城の外では、まぶしい日がかゞやいて、風は近所の國からはるかに森の角笛の響をもつて來ました。船はあとから／＼通りすぎて挨拶をして行きます——ドーン、ドーン。そしてクロンブルクからもドーン、ドーンと答へます。でもどんなにけたたましい砲の音がしても、デンマルクぢいさんは目をさましません、それはたゞの「今日は。」と、「いやあ。」

にすぎないからです。デンマルクぢいさんが目をさます前には、それとはちがつた砲の音が響かなくてはなりません。でもデンマルクぢいさんのゐることの信じられてゐる限り、ぢいさんはきつと目をさますでせう。

註1 デンマルクの紋章は九つの心臓形の中に三頭の獅子をあしらつたものである。

註2 この才美を兼ねた王女は反逆の罪にとはれたコルフイツ・ウルフェルトの妻であつた。王女の罪状といふのは、たゞその不幸な夫にあくまで眞愛を守つたといふことであつた。そして二十二年の間恐しい牢獄の裡にくらして、その迫害者たる女王ソフィア・アメリアが死んではじめて釋放された。

註3 一七一〇年デンマルクとスウェーデンの間にキョーゲ灣の海戦が闘はれた時、フワイットフルトのつたダネプロク號が火災にかゝつた。キョーゲの町と、風のため自分の船の方に吹きつけられてゐる僚艦を火災から救ふため、フワイットフェルトは自身と船を擧げて空中に爆破させた。

註4 ハンス・エゲータは一七二一年グリーンランドに赴き、十五年間刻苦して、名状しがたい辛慘を嘗めた。かうしてよく基督教の傳道に成功したのみならず、自身を一個基督教者の儀表として仰がしめた。

デンマルクぢいさん

註5 シェットランドの西海岸を旅行する途中この王は或老婆の小家を訪れた。王が歸つたあとから老婆は追つかけて来て、王の名を記念のため梁の上のこしてくれと頼んだ。王は引つ返してその願をかなへた。この王は生涯農民のためによく盡した人である。農民は深くこの王の死を悲しんで、コーペンハーゲンから王陵のロースキルドまで四テンマルク哩の間、靈柩を擔ふことを願ひ出たといふ。

註6 一八〇一年四月二日デンマルクとイギリスの間に、コーペンハーゲンの港で惨憺たる海戦が闘はれた。

註7 コーペンハーゲンの天文臺。

註8 有名な彫刻家メルテル・トルソルセン。

——了。——

童話全集 (第二卷) — 近刊 —

册三全 <集全話童ンセルデンア> (1)	
印刷所 東京市小石川区西江川町 電話小石川五九二番 富士印刷株式會社 印刷者 佐々木 俊一	大正十三年八月廿七日印刷 大正十三年九月三日發行 (定價貳圓八拾錢) 編輯者 楠山正雄 發行者 佐藤義亮 發行所 東京市牛込區矢來町三番地 新潮社 電話牛込 八八八八 〇〇〇〇 九八七六 番番番番 番二四七一(東京)發振

海外文學新選

- | | | | |
|-----|--------------------------------|-------------------------------|----------------------------|
| (1) | 死刑をくふ女 <small>(小説集)</small> | ブラスコ・イバニエス <small>(西)</small> | 永田寛定氏譯 |
| (2) | チャッテルトン <small>(戯曲)</small> | アルフレッド・ウイニイ | 小林龍雄氏譯 <small>(佛)</small> |
| (3) | イスカリオテのユダ <small>(小説)</small> | アンドレ・エフ | 米川正夫氏譯 <small>(露)</small> |
| (4) | 勝利者と敗北者 <small>(戯曲)</small> | ゴルスワージー | 山田松太郎氏譯 <small>(英)</small> |
| (5) | 影の彌撒 <small>(小説集)</small> | アナトール・フラン | 山内義雄氏譯 <small>(佛)</small> |
| (6) | ヘアリンカーン <small>(戯曲)</small> | ドリクウオター | 横山有策氏譯 <small>(英)</small> |
| (7) | 彼女は眠れり <small>(小説集)</small> | ドワイモ | 梅田寛氏譯 <small>(露)</small> |
| (8) | 三分間のローマンス <small>(小説集)</small> | ハイリップ・マン | 青木武雄氏譯 <small>(獨)</small> |
| (9) | 長い歸りの船路 <small>(戯曲集)</small> | ユーチン・オニール | 北村喜八氏譯 <small>(米)</small> |

各冊中版六百十頁 ◆ 價六拾錢・送料六錢

海外文學新選

- | | | | |
|------|------------------------------|----------|-----------------------------|
| (10) | 盲人國その他 <small>(小説集)</small> | エチジウエルズ | 石井眞峰氏譯 <small>(英)</small> |
| (11) | 吸血鬼 <small>(小説集)</small> | マルセル・シュウ | 矢野目源一氏譯 <small>(佛)</small> |
| (12) | アグラフェーナ <small>(小説集)</small> | ザイッ | 松永信成氏譯 <small>(露)</small> |
| (13) | バスク牧歌調 <small>(小説集)</small> | ピオ・パ | 笠井鎮夫氏譯 <small>(西)</small> |
| (14) | ギリシアの踊女 <small>(小説集)</small> | シユニツ | 大槻憲二氏譯 <small>(埃)</small> |
| (15) | 卵の勝利 <small>(小説集)</small> | アンダス | 吉田甲子太郎氏譯 <small>(米)</small> |

◆ 以下續々刊行

『海外文學新選』は、早稻田大學、外國語學部該教授を中心とせる譯壇十
二名家の編纂に成るもので、時代に先驅する最新の作品と共に、近代文學
の名篇をも網羅し、百五十冊を第一期刊行とする。譯は編纂者に於て仔細
に審査し、完璧と認められたものでなければ公刊せぬ事を一大特色とする。

各冊中版六百十頁 ◆ 價六拾錢・送料六錢

■ 泰西戯曲選集 ■

(1)	ピニクヤス	ロミオと	エジュトリ	久米正雄氏譯
(2)	リメテクル	青い鳥	楠山正雄氏譯	
(3)	イブセン	人形の家	中村吉藏氏譯	
(4)	ピエクヤス	ハムレット	久米正雄氏譯	
(5)	ロスタン	シラノ・ド・ラベルジュ	楠山正雄氏譯	
(6)	ドストリヒン	ソクラテス	福田久道氏譯	
(7)	キウエドデ	地霊 <small>(附)のラドラ</small>	楠山正雄氏譯	
(8)	シナイード	悪魔の弟子	市川又彦氏譯	
(9)	ヘソベル	ユウデイト	中島清氏譯	

◆ 各冊二頁百 ◆ 價九錢 ◆ 送附一冊六錢 ◆

949-73

A.46

B(1)

終

